和歌山市文化体育振興事業団調査報告書　第21集

山口遺跡 第6次発掘調査概報

1999

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

序　文

和歌山市は、和歌山県の北西端に位置し、本市のほぼ中央を西流して紀伊水道に注ぐ紀ノ川によって形成された広大な和歌山平野を中心として数多くの遺跡が密集しており、古代より歴史的に重要な地域であったことがうかがえます。

今回、調査を行いました山口遺跡は、江戸時代に紀州徳川家の別邸であった山口御殿が存在したところであり、現在でも山口小学校の中庭には当時入り口に架けられていたとされる石橋が残されています。また、この周辺は過去の調査において弥生時代から古墳時代にかけての遺構、遺物が数多く検出され、複合遺跡としても知られるようになりました。

今回の調査の結果、新たに古墳時代の水田跡や室町時代の建物跡が見つかり、また御殿跡に関連するとみられる石列が検出できました。遺物では中国製の大皿に朱書きによる文字が施されたものなど貴重な発見がありました。

ここに報告する調査概要が、地域の歴史の解明に活用されれば幸いです。最後になりましたが、調査にあたり御指導、御協力を頂きました関係各位の皆様に深く感謝いたします。

平成11年３月31日

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団
理事長　北　氏　　武

例　言

1．本書は、和歌山市里146番地所在の市立山口小学校敷地拡張に伴う発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、和歌山市の委託事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託し、対象面積214㎡を1998年７月28日から９月３日までの期間で実施した。

3．発掘調査及び報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

和歌山市教育委員会		財団法人和歌山市文化体育振興事業団	
教育長	山口喜一郎	理事長	北氏　武
文化振興課長	久保隆司	総務課長	川嵜健治
文化財班長	小松埼甫	事務員	奥野勝啓（調査庶務担当）
学芸員	前田敬彦	学芸員	井馬好英（発掘調査担当）

4．本書掲載の遺跡・遺構及び遺物写真撮影は井馬と同財団学芸員藤薮勝則が分担して行った。

5．本書の執筆は発掘調査担当の井馬のほか、藤薮が分担し、編集は井馬が行った。なお、「３．既往の調査」については前田敬彦（和歌山市教育委員会）が執筆した。各執筆分担の文責は目次に示した。

6．写真図版の遺物に付した数字番号は、実測図番号に対応する。

7．中国製青磁盤裏の文字の判読について、和歌山市立博物館館長三尾功氏、同副館長寺西貞弘氏に御教示を受けた。記して感謝申し上げます。

8．概要報告書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益な御教示・御指導を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

1．調査の契機と経過……（井馬好英）……1
2．位置と環境……（藤薮勝則）……2
3．既往の調査……（前田敬彦）……4
4．調査の方法と経過……（井馬）……6
(1) 調査の方法……6
(2) 調査の概要……7
5．遺構……（井馬）……8
(1) 第1区の遺構……8
(2) 第2区の遺構……8
(3) 第3区の遺構……14
6．遺物……（井馬）……15
(1) 弥生・古墳時代の土器……15
(2) 奈良・平安時代の土器……16
(3) 鎌倉・室町時代の土器……17
(4) 江戸時代の土器……20
(5) 瓦……21
(6) 石製品……23
(7) 金属製品……23
7．まとめ……（井馬）……24
(1) 第2区第3遺構面検出の水田遺構について……24
(2) 中世における遺構・遺物の検討……25
(3) 山口御殿関係遺構について……26
報告書抄録……28

図版目次

図版１　第１区調査前の状況（西から）、第２区調査前の状況（北から）
図版２　全景（東から）、第１区全景（南から）
図版３　第２区第１遺構面全景（北から）、第２区第１遺構面全景（東から）
図版４　第２区第２遺構面全景（北から）、第２区第２遺構面全景（東から）
図版５　第３区東西トレンチ全景（東から）、第３区南北トレンチ全景（北から）
図版６　第２区SV-１・２（東から）、第２区SD-６（東から）
図版７　第２区SD-６（西から）、第２区東壁SD-６土層堆積状況（西から）
図版８　第２区SK-６（北から）、第２区SK-６土層堆積状況（東から）
図版９　第２区ピット列（南東から）、第２区ピット列（北から）
図版10　第２区P-31・32（南から）、第２区P-31土層堆積状況（南から）
図版11　第２区第３遺構面（東から）、第２区第３遺構面（北から）
図版12　第２区第３遺構面水田遺構（東から）、第２区東壁畦畔部土層観察状況（北から）
図版13　第２区青磁盤出土状況（上が北）、第２区青磁盤出土状況（上が東）
図版14　第１区南壁Ｗ０～４ｍ付近土層堆積状況（北から）、第１区南壁４ｍ付近土層堆積状況（北から）
図版15　第２区東壁S26m付近土層堆積状況（西から）、第２区南壁W21m付近東壁土層堆積状況（北から）
図版16　第３区東西トレンチ南壁W34～38m付近土層堆積状況（北から）、第３区南北トレンチ西壁Ｓ２ｍ付近土層堆積状況（東から）
図版17　弥生土器、土師器、須恵器
図版18　土師器、瓦器、瓦質土器
図版19　輸入陶磁器、国産陶磁器
図版20　輸入陶磁器
図版21　瓦
図版22　瓦、石製品、銭貨

1．調査の契機と経過

和歌山市教育委員会施設課が、和歌山市里146番地に所在する和歌山市立山口小学校において同校の敷地を拡張することになり、この範囲が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である里遺跡（遺跡番号144）と山口御殿跡（遺跡番号380）の範囲内であったため、和歌山市教育委員会（文化振興課）が指導を行い、遺構の有無を確認するための発掘調査を本財団が実施することになった。

この遺跡は弥生時代の周知の遺跡である里遺跡の範囲内であるが、過去の調査成果などからみて北に隣接する山口遺跡（遺跡番号142）と同様の性格をもつことが確認されている。よって、同教育委員会の指導のもと、本調査を山口遺跡第５次調査で提示された「山口小学校周辺の調査は、山口遺跡の発掘調査として包括することにする」[註1]の見解に従い、山口遺跡第６次調査とした。

山口遺跡では同小学校に関する工事に先立つ発掘調査をこれまで５次にわたり行い、弥生時代から江戸時代にかけての数多くの遺構、遺物を検出している。今回の調査地は既往の調査地点のなかで最も南西部に位置する地点であり、山口御殿跡推定地の範囲内やや西寄りに相当する（第２図）。山口御殿跡に関するものでは、同小学校の中庭に御殿の入り口に架けられていたとされる石橋が残されている（写真１）。調査対象地は、最も東側の現小学校の敷地内に位置する第１区（面積53㎡）、その西側の第２区（面積124㎡）、第２区の北西に位置する第３区（面積37㎡）の３ヶ所に分かれ、合計面積214㎡である。

現地調査は、まず重機による機械掘削を平成10年７月28日から30日までの３日間で行い、機械掘削に並行して７月29日から作業員による人力掘削を開始した。人力掘削は約１ヶ月の期間を要し、第１遺構面の全景写真撮影を８月19日に、第２遺構面の全景写真撮影を８月25日に、また第２区南東隅において部分的に調査を行った第３遺構面の写真撮影を８月27日にそれぞれ行い、９月３日にすべての作業を終了した。また調査期間中である８月21日に同小学校の児童４～６年生約90名を対象に現地説明会を実施した（写真２・３）。

写真１　山口小学校に残されている石橋

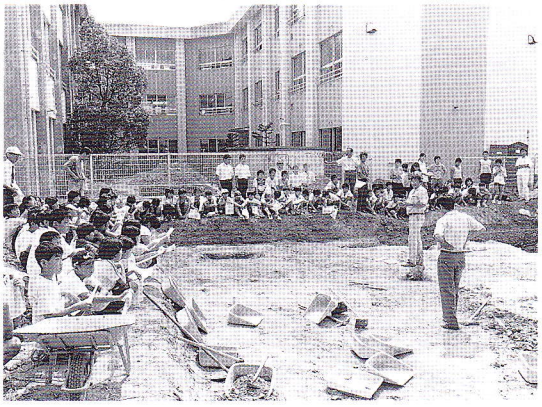


写真２　現地説明会風景

写真３　同　上

註

(1)『山口遺跡第５次発掘調査報告書』　和歌山市教育委員会　1990年

2．位置と環境（第１図）

遺跡の所在する和歌山市は、和歌山県の北西端に位置しており、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町及び阪南市に、東は和歌山県那賀郡岩出町及び貴志川町に、また南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。本市は、和泉山脈南裾に沿って西流し、紀伊水道に流れ込む紀ノ川(全長136km)の沖積作用よって形成された和歌山平野を中心に立地している。紀ノ川北岸の地形については、和泉山脈より断続的に派生する丘陵、また同山脈に源を発し南流する諸河川の形成した扇状地が展開し、南岸では沖積平野とその南端を取り囲むように竜門山系から派生する丘陵が存在する。

今回調査の対象となった山口遺跡は和歌山市の北東端、那賀郡岩出町との境界近くに位置し、雄山峠に源を持ち、南下する雄山川によって形成された扇状地の南端部、標高13～14ｍ付近に立地する。調査地周辺の遺跡について概観すると、縄文時代では府中Ⅲ遺跡（33)、川辺遺跡（13）などがあげられる。本遺跡の南約１kmに所在し、縄文時代から室町時代にかけての遺構・遺物が検出された川辺遺跡では、縄文時代晩期の土器が多数出土し、同じく晩期の土器棺墓等の遺構が確認されている。弥生時代については、宇田森遺跡（22)、北田井遺跡（23)、吉田遺跡（６）があげられ、南岸では奥山田遺跡（51）がある。本遺跡の南西約２kmに位置する宇田森遺跡は、標高約10ｍの平野部に営まれた遺跡であり、弥生時代中期の竪穴住居、同じく中期から後期の溝等が検出され、出土した弥生土器は県内弥生土器編年の基準資料である。また、南西約３kmに所在する北田井遺跡は、弥生時代中期から後期を中心として古墳時代前期までの竪穴住居が検出され、連錦として集落が営まれたことがうかがえる遺跡である。さらに東約１kmに位置し、和歌山市平岡及び那賀郡岩出町吉田までを範囲に含む吉田遺跡は、紀ノ川氾濫原の微高地上に営まれた弥生時代から鎌倉時代にかけての集落遺跡であり、弥生時代中期から後期の竪穴住居、壺棺、中期の方形周溝墓が検出されている。特に９本の柱をもつ構造で長径12.5ｍ、短径10.8ｍを測り、石器の未製品や石屑が多く検出された竪穴住居は、石器製作場の可能性が指摘されている(註１)。また方形周溝墓は一辺約20ｍのものである。奥山田遺跡は和歌山市下三毛に所在し、標高約20～30ｍの段丘状の低丘陵部に立地する。弥生時代中期から後期の竪穴住居が検出され、さらにこの丘陵裾部には同じく中期から後期の環濠状遺構が存在し、いわゆる高地性集落とみられている(註２)。本調査地周辺では弥生時代前期段階の遺跡はいまだ確認されておらず、本格的に弥生時代の集落が営まれるのは弥生時代中期以降のことである。古墳時代については、基本的には弥生時代の集落を踏襲しており、先述した川辺遺跡、吉田遺跡などが集落遺跡として知られている。川辺遺跡では古墳時代末頃の竪穴住居、掘立柱建物、井戸などが検出されており、吉田遺跡では古墳時代の竪穴住居、掘立柱建物が確認されている。さらに紀ノ川北岸、和泉山脈の南麓丘陵上には上野古墳群(16)、山口古墳群、本遺跡の西１kmの平野部には藤田古墳（４）が築かれている。また紀ノ川南岸、竜門山系の西端丘陵上には国史跡であり総数700基にも及ぶ岩橋千塚古墳群（41）が存在する。上野古墳群（１～８号墳)、山口古墳群（１～11号墳)は10基前後の円墳を中心とした古墳群であるが、そのうち上野７号墳と山口３号墳は前方後円墳である。藤田古墳は、竪穴式石室をもち直刀、鉄器、土器が出土している。奈良時代から平安時代にかけては、白鳳寺院として紀伊薬師寺とも呼ばれる国史跡の上野廃寺（15）があり、薬師寺式伽藍配置をもつ。また県史跡の山口廃寺（８）は、緑色片岩の塔心礎を持つことで注目される。山口・

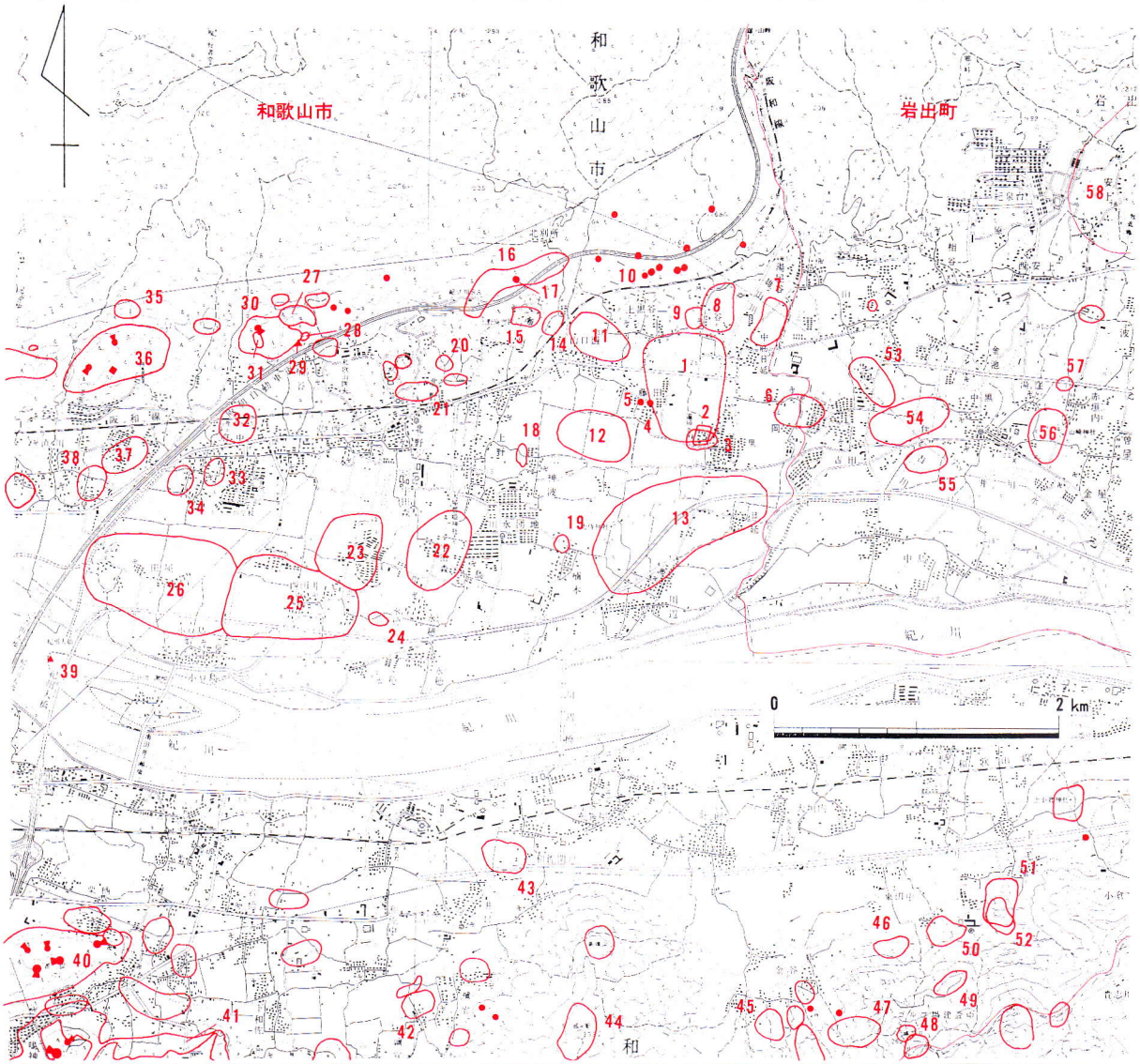
里地区周辺は、大和から紀伊への南海道及び熊野参拝に向かう熊野街道の宿駅がおかれ、天正の始め山口十番頭のひとり、二番山口新左衛門が根来衆徒に組したことが知られ、那賀郡岩出町に所在する根来寺とのかかわりが注目される地域である。(註3) また現在山口小学校の敷地周辺は中世には地頭易井氏、近世には浅井氏の居宅、その後紀州徳川氏の別邸山口御殿が存在した場所でもある。

註

(1)『吉田遺跡第２次発掘調査概報』　和歌山県教育委員会　1971年

(2)『奥山田遺跡現地説明会資料』　和歌山市教育委員会・㈱和歌山市文化体育振興事業団　1988年

(3) 松田茂樹　「和歌山市北部における歴史的建造物（山口御殿）」　『文化財総合調査報告（２）』　和歌山市教育委員会　1979年所収



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
	和歌山市		15	上野廃寺跡	白鳳	30	八王寺山古墳群	古墳	45	モント古墳群	古墳
1	山口遺跡	弥生～平安	16	上野古墳群	古墳	31	橋谷Ⅲ遺跡	弥生	46	東国山古墳群	古墳
2	山口御殿跡	江戸	17	上野７号墳	古墳	32	府中遺跡		47	小倉古墳群	古墳
3	里遺跡	弥生	18	神波遺跡	弥生	33	府中Ⅲ遺跡	縄文	48	金谷廃寺跡	鎌倉
4	藤田古墳	古墳	19	楠本遺跡	古墳・中世	34	府中Ⅱ遺跡	弥生	49	宮山古墳群	古墳
5	砲古墳	古墳	20	北野窯跡		35	湯谷池西遺跡	縄文～弥生	50	寺山古墳群	古墳
6	吉田遺跡	弥生～奈良	21	北野遺跡		36	直川八幡山古墳群	古墳	51	奥山田遺跡	弥生～鎌倉
7	中筋日延遺跡		22	宇田森遺跡	弥生	37	府中Ⅳ遺跡	弥生～古墳	52	奥山田古墳群	古墳
8	山口廃寺跡	白鳳	23	北田井遺跡	弥生～古墳	38	鳥井遺跡			岩出町	
9	谷遺跡		24	永穂遺跡	古墳	39	紀ノ川銅鐸出土地	弥生	53	山一遺跡	弥生～奈良
10	山口３号墳	古墳	25	西田井遺跡	弥生～中世	40	花山古墳群	古墳	54	中黒Ⅰ遺跡	弥生～奈良
11	上黒谷遺跡		26	田屋遺跡	弥生～古墳	41	岩橋千塚古墳群	古墳	55	中黒Ⅱ遺跡	弥生～奈良
12	藤田遺跡	弥生	27	橋谷Ⅰ遺跡	弥生	42	鞆宜貝塚	縄文	56	山崎遺跡	古墳～中世
13	川辺遺跡	縄文～中世	28	橋谷Ⅱ遺跡	弥生	43	井ノ口遺跡	古墳～中世	57	赤垣内遺跡	中世
14	上野遺跡		29	橋谷銅鐸出土地	弥生	44	城ヶ峯城跡	中世	58	根来寺坊院跡	平安～

第１図　山口遺跡周辺の遺跡分布図

3．既往の調査

山口遺跡は、和泉山脈から南下する雄ノ山川の形成した扇状地上に立地する遺跡である。遺跡の推定範囲は東西600ｍ、南北600ｍの規模をもつ。既往の調査としては、遺跡南端の市立山口小学校敷地内の各種工事に伴うものが和歌山市教育委員会により実施され(第１～５次調査)、県道改良工事に伴う調査が財団法人和歌山県文化財センターにより実施されている。以下に、それらの調査内容について略述する。

第１次調査（昭和57年度）　山口小学校のグランド整備工事に伴い７ケ所のトレンチ調査（調査面積113㎡)を実施した。主な遺構としてはトレンチ１で６世紀代のピット、トレンチ４の西端で江戸時代の山口御殿（紀州徳川家の別邸）の周濠の東肩部が確認された。各調査区の遺構面のレベルによると、この周囲では北東から南西方向に緩やかに傾斜する地形が復元される。二次堆積ながら調査区全域で弥生土器が出土し、その他としては須恵器、瓦片（格子目叩文平瓦）等が出土している。

第２次調査（昭和57年度）　校舎建築に伴い680㎡が調査され、江戸時代と古墳時代の２面の遺構面が確認された。江戸時代の遺構面では、石組井戸、ピット列、古墳時代の遺構面では溝状遺構が検出されている。江戸時代の遺構は、山口御殿に関係するものと判断される。出土遺物としては、弥生土器、須恵器、土師質土器、陶磁器、石臼片、宋銭、寛永通宝、唐草文軒平瓦などがある。

第３次調査（昭和59年度）　幼稚園園舎の建築に伴い約300㎡が調査された。遺構面が３面あり、下層より古墳時代の溝２条、奈良～中世の溝２条、中世～近世の溝１条が検出されている。出土遺物には弥生土器、須恵器、土師器、製塩土器、円筒埴輪、フイゴ羽口、紡錘車、サヌカイト片などがある。

第４次調査（昭和62年度）　体育館建築に伴い約800㎡が調査され、細かくは４面の遺構面が確認された。江戸時代の山口御殿に関係する遺構としては、周濠、瓦敷き溝、礎石、埋桶遺構などが検出された。江戸時代遺構面を形成する砂礫層と砂質土の互層の下の地表から約１ｍの下層には、古墳時代～奈良時代を中心とする遺構面があり、７条の溝が検出された。最下層の遺構面では弥生時代後期～古墳時代前期の溝３条、土坑１基、井戸状遺構１基と古墳時代の土坑、溝状遺構が同一面で検出された。

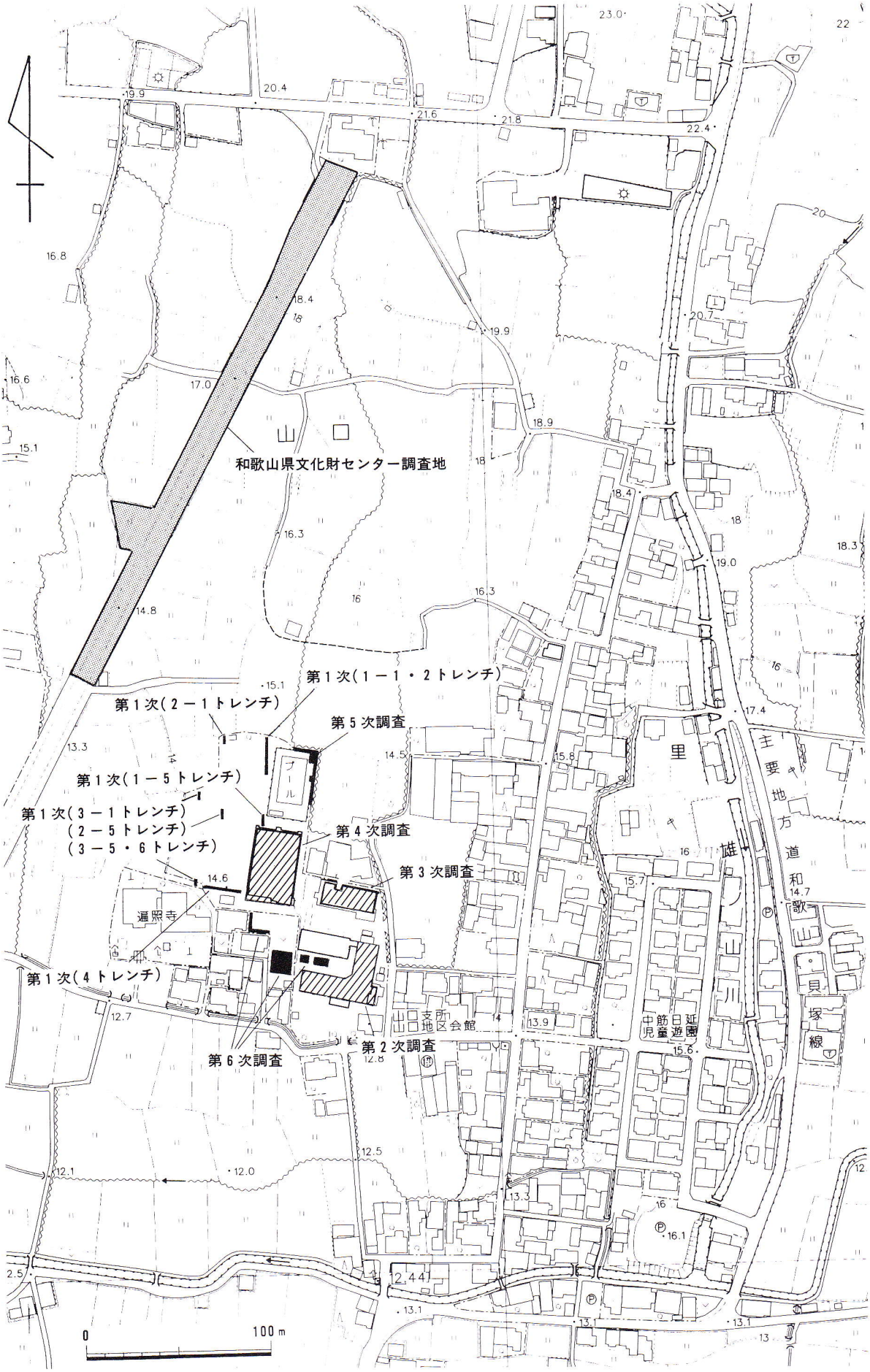
第５次調査（昭和62年度）[(註１)]　プール建築に伴い約78㎡を調査し、弥生時代の溝、古墳時代の掘立柱建物を検出した。包含層からは多量の弥生時代後期末の土器が出土し、隣接する北側の水田地において当該時期の遺構の存在している可能性が高いとみられた。特に、狭い調査区ながら古墳時代の集落の一画とみられる遺構が検出された成果は大きいと判断される。

和歌山県文化財センター調査（平成６年度）[(註２)]　県道和歌山･貝塚線道路改良工事に伴う調査であり、３ケ所で5780㎡が調査された。調査地は標高14～17ｍの緩斜面に位置する。検出された遺構としては弥生時代の溝１条、古墳時代後期の掘立柱建物２棟、平安時代中期とみられる掘立柱建物３棟がある。出土遺物としては、サヌカイト片、弥生土器、須恵器、土師器が挙げられる。特にサヌカイト片は、人為的な剥離により得られたもので、石器素材とみられ注目される。

註

(1)『山口遺跡第５次発掘調査報告書』　和歌山市教育委員会　1990年

(2) 村田弘　「山口遺跡の発掘調査」　『㈶和歌山県文化財センター年報』　㈶和歌山県文化財センター　1994年



第２図　既往の調査地点及び今回の調査位置図

4．調査の方法と経過

(1) 調査の方法

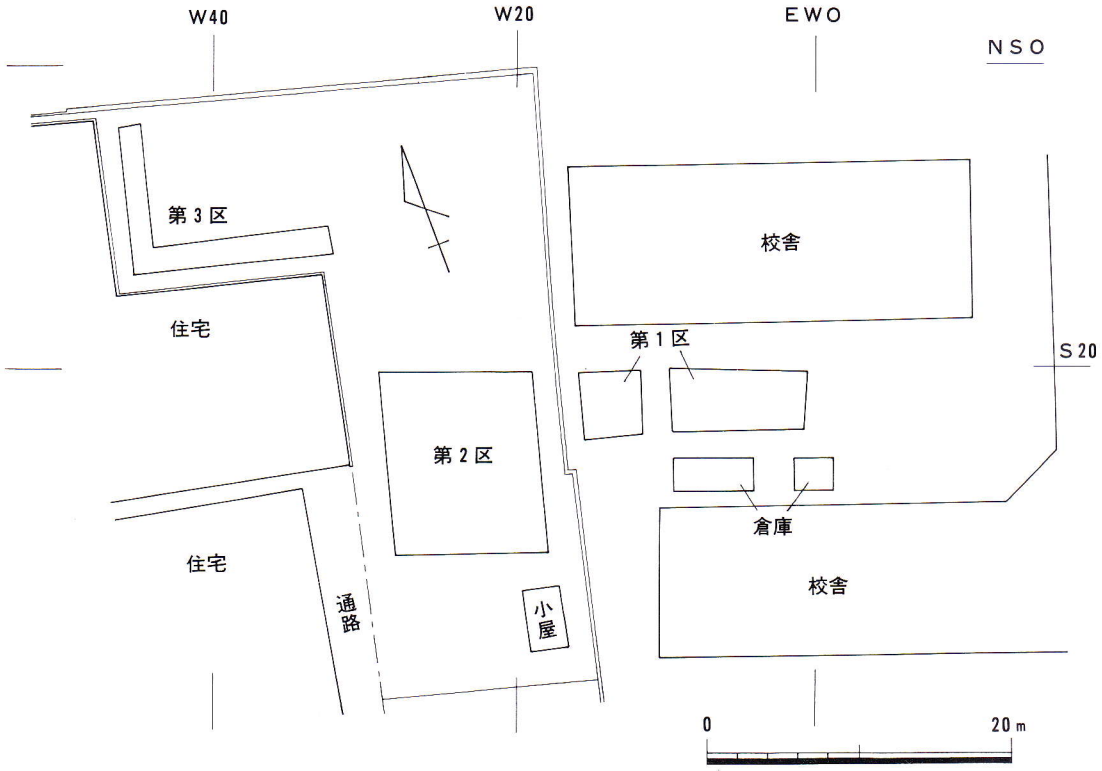
調査地区の設定については、まず第１区を現山口小学校の範囲内において幅約４ｍ、長さ15ｍのトレンチを既存の排水施設等の部分約２ｍを避けて設定した。第２区は教育施設の建設予定地であることから東西約10ｍ、南北約12ｍの調査区とした。また第３区はフェンス設置予定地を対象とし、幅約1.7ｍ、総延長22ｍのトレンチを「L」字状に設定した。各調査区の名称は、従来どおり北東側に位置するものから第１区と定め、以下順次に番号を付した（第３図）。

調査の方法は、当地が整地等による近代以降の堆積が厚くみられる地点であるため、第３層（江戸時代の遺物包含層）上面まで重機を用いて掘削を行い、第３層以下の遺物包含層と遺構の調査を人力掘削によって行った。

溝等の遺構掘削については、土層堆積観察用のベルトを直交するライン上に設け、写真撮影を行い、２層以上の堆積が確認できたものについては実測図等による記録保存を行った。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

次に、図面による記録は、調査区北東隅に仮原点（NS0.EW0）を設け、ほぼ調査区に直交するラインを仮N方向と定め、原点から南をS、西をWで示し、このラインを基準に実測図の作成を行った。このため、基準ライン上の仮N方向は磁北から約21°西に振っている。図面の縮尺は、基本的に1/20の縮尺を用いた。平面図及び土層堆積状況図はすべて手実測で行い、重要と考えられる石列遺構などについては1/10の縮尺を用いた。

また遺跡の水準は、国家水準点を基準とした。

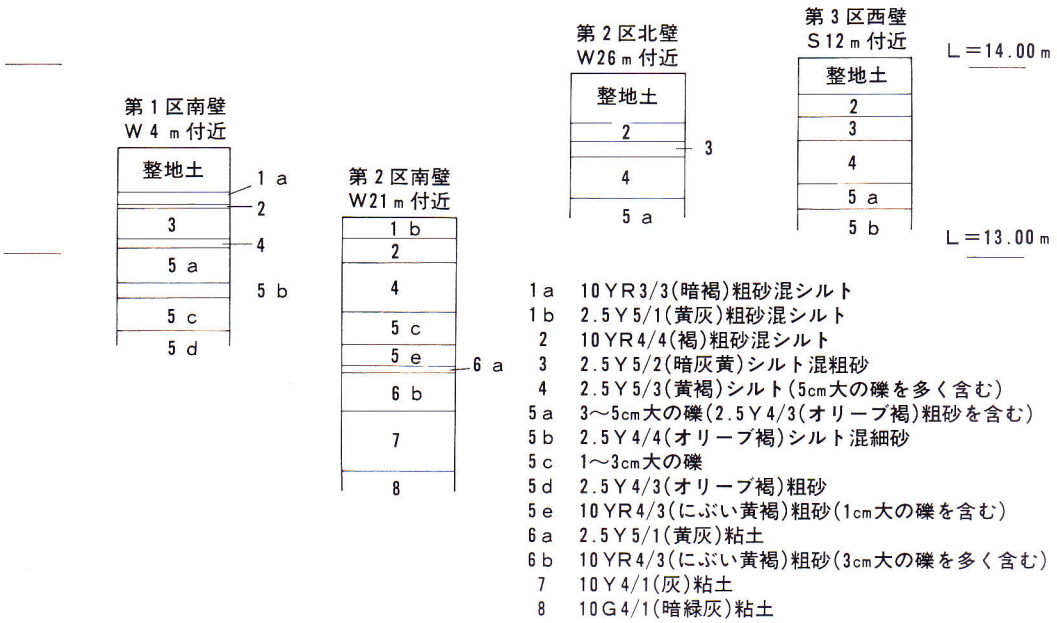


第３図　調査地区割図

(2) 調査の概要

当調査地の基本層序は、第4図に示したとおりである。当地は和泉山脈から派生する丘陵の谷部から広がる扇状地の末端部にあたるものとみられ、北東から南西にかけて緩やかに傾斜をもつ地形を成している。

まず表土である整地土は、第2区中央部から南側を除いて第1区から第3区までほぼ全面に堆積している。この整地土は第1区ではグラウンドの表面を整えるものであり、また第2・3区では農耕に伴うとみられる粗砂（川砂）を用いている。整地土以下の状況は、近代以降の堆積層（第1・2層）があり、その下層に江戸時代後期頃の遺物包含層（第3層）が全区をとおして検出できた。この第3層は10～15cmの厚みをもつ暗灰黄色系の粗砂混シルトであり、砂岩礫が多く含まれている。この土層の下面が江戸時代の遺構を多数検出した第1遺構面である。第1遺構面を上面に形成する第4層は第2区中央部から南側部分を除く各区において検出した室町時代末期から江戸時代初頭にかけての遺物包含層である。この土層は礫を多く含む黄褐色系のシルト質であり、第1区では5cm程度と薄く堆積しているのに対し、第2・3区では20cm前後と厚くなる。この第4層の下面が室町時代の遺構を検出した第2遺構面である。さらに下層の状況は、5～6単位に細分できる第5層が堆積する。この第5層は厚さ5～30cmを測る礫層と5～10cm程度の厚みをもつ粗砂層の互層となり、第2区の南壁面下に設定したサブトレンチ内の土層観察から60cm程度の厚みをもつことが確認できた。この第5層は弥生時代から平安時代にかけての遺物を含む土層であり、その検出状況から土石流等によって一気に堆積した自然堆積層と考えられる。第5層下の状況は、上下に細分できる第6層が堆積する。上層の6a層は黄灰色の粘土、下層の6b層は礫を含むにぶい黄褐色系の粗砂であり、古墳時代の遺物を少量含む。この第6層の下面が古墳時代の遺構を検出した第3遺構面である。また第7層は弥生時代後期の遺物をごく少量含む灰色粘土、第8層は無遺物層とみられる暗緑灰色粘土である。



第4図　調査地土層柱状模式図

5．遺構

遺構は、第１～３区をとおしてすべての調査区において検出した。特に第２区では古墳時代から江戸時代にかけての遺構面を３面確認し、その面ごとに良好な遺構を検出した。

第１遺構面（江戸時代の遺構面）では東西方向の溝、溝状遺構、石列遺構、土坑などを検出した。また第２遺構面（室町時代の遺構面）では調査区南端において検出した溝や調査区北半部で検出した建物に伴うとみられるピット列、土坑などの遺構を検出した。さらに調査区南東隅において設定した下層調査のためのグリッドにおいて第３遺構面（古墳時代の遺構面）を検出し、同時期の水田と水田に伴う畦畔を検出した。このほか、第１区では第１遺構面に対応する溝状遺構やピットを第３区では第１遺構面及び第２遺構面に対応するピットや土坑をそれぞれ検出した。

以下、各調査区ごとに遺構を説明する。

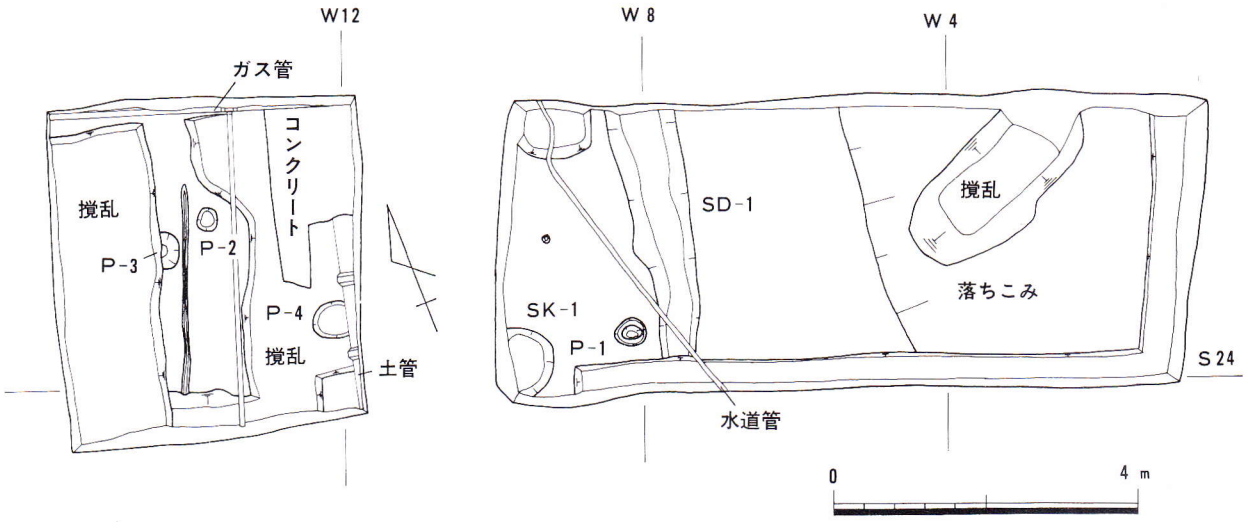
(1) 第１区の遺構（第５図、図版２下）

第１区は今回の調査では最も東に位置する調査区であり、山口小学校の南北両校舎の中庭にあたる地点である。この調査区では過去に水道管、下水道管、ガス管が埋設されており、この埋設工事に伴うとみられる撹乱坑を多く検出した。特に、W12ｍから西側ではほとんど遺構面が残存していない状況であった。またＷ５ｍから東側は、江戸時代の後期頃に第４層上面から大きく掘り込まれたとみられる落ち込みを検出した。この堆積土内からは、肥前系の陶磁器や桟瓦、寛永通宝などが出土している。

第１区の遺構は、すべて第４層上面（標高13.15ｍ前後）において検出したもので、第１遺構面に対応するものと考えられる。この第１遺構面は、東側に向かって緩やかに下る傾斜をもつ。遺構は、まずＷ８ｍ付近において調査区を南北に横切る溝状遺構（SD-１）がある。このSD-１は幅80cm、深さ15cm程度のものであり、覆土は礫を含む10YR4/2（灰黄褐）粗砂である。このほか、調査区中央部から西側を中心に土坑１基ピット４個などを検出した。

(2) 第２区の遺構

第２区の状況はS26ｍライン上にほぼ平行する溝（SD-２）を境とし、南北両側の地表面で約80cm



第５図　第１区遺構全体平面図

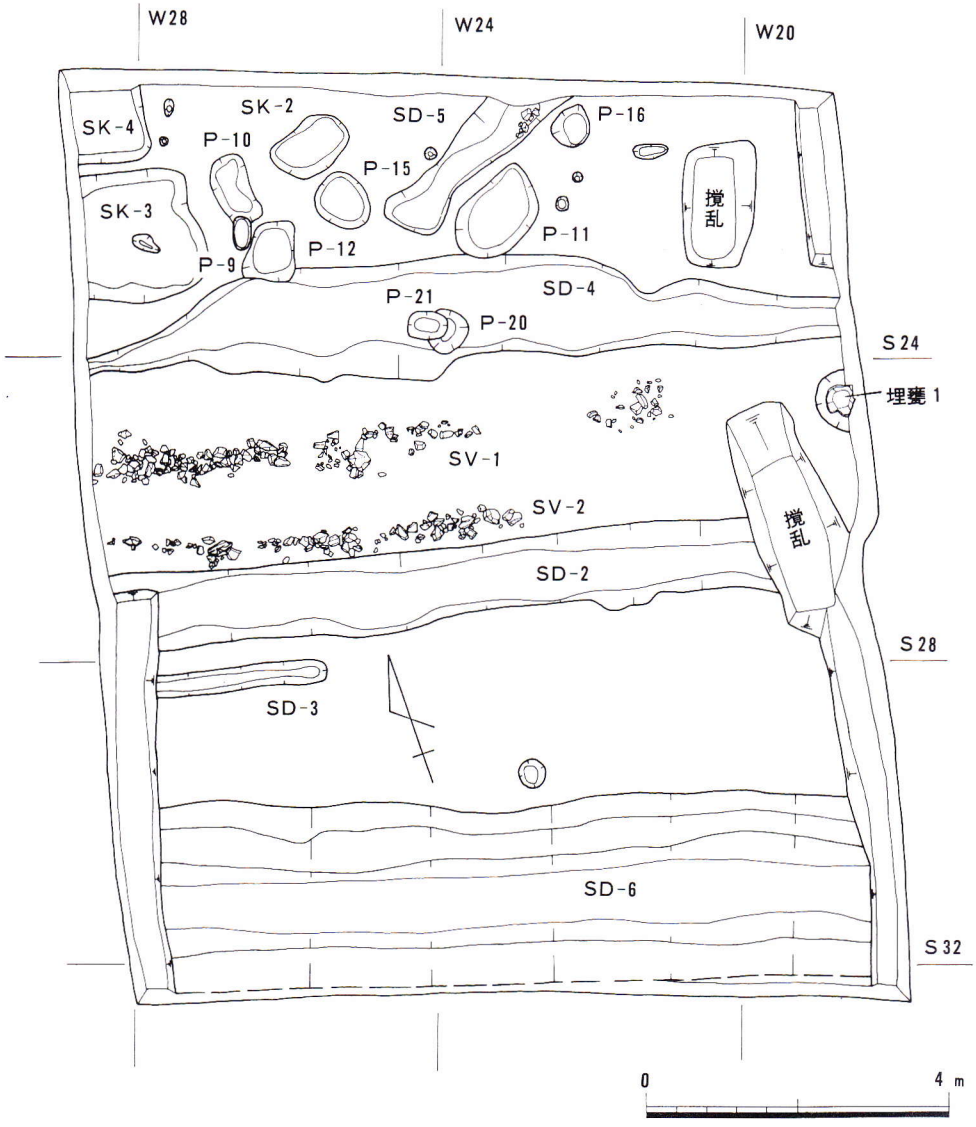
の比高差がある。この段差は、SD-2の北肩に残欠として残されていた石垣から明治時代頃に石垣が構築され、その石垣を構築した際に石垣に沿った側溝を設けたものがSD-2であると考えられた。このSD-2から北側は、第1～3区につながる第1遺構面を形成する第4層が堆積するのに対し、南側は第3層の下面が第5層となる。この状況から、南側の第4層は江戸時代以降に削平された可能性が高いと思われる。

以下、遺構面ごとに説明する。

[第1遺構面]（第6図、図版3） 第1遺構面は、調査区北半部において第3層掘削後、第4層上面（標高13.50m前後）において検出したものである。

遺構は、まず調査区北半部S24mライン付近において調査区を東西に横切る溝状遺構（SD-4）がある。この溝状遺構は、調査区東西両端で狭まるものであり、中央部での最大幅1.3m、深さ15cm程度を測る。覆土は直径5cm程度の砂岩礫を多く含む褐色系の粗砂混シルトで、瓦などの遺物を含む。

SD-4の南側では幅約1.2mの間隔をもって平行にのびる石列（SV-1・2）を検出した（図版6



第6図　第2区第1遺構面遺構全体平面図

上)。この石列は磁北N-75°-Wの方向性をもつもので、遺構面に石を置き並べられた状況で検出した。この遺構に用いられた石材は、ほとんどが5～20cm大の和泉砂岩であり、数個の結晶片岩が含まれていた。また遺物では伊万里の染付や瓦が出土している。検出した状況から、この2条の石列は、山口御殿に関係する土塀等の基礎石の可能性が高いとみられる。

また、SD-4の北側では溝状遺構（SD-5）や土坑（SK-2～4）など多くの遺構を検出した。SD-5はW24m付近の北壁付近で検出したもので、幅60cm前後、長さ2.6m以上、深さ15cm程度を測る。この遺構の覆土は黄褐色系の粗砂混シルトの単層である。

土坑(SK-2～4)は、ともに直径5cm程度の砂岩礫を多く含むオリーブ褐色系の粗砂混シルトであり、すべてに焼土が出土するなど関連性があるものとみられる。またピットとして扱ったが土坑状のもの（P-10～12・15・16）については、砂岩礫を多く含むもの（P-11・12・15・16)、焼土を含むもの（P-11)、炭化物を含むもの（P-12）などがある。

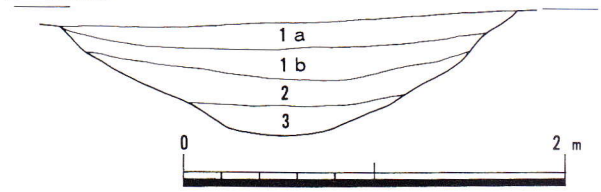
このほか、SD-2の北側で検出した溝状遺構（SD-3）や調査区東壁中央部で検出した埋甕1は、覆土や出土遺物などから明治時代以降のものであるとみられる。

また、調査区南壁に沿って検出した溝(SD-6)は、下層より江戸時代初頭の遺物が出土したことから最終埋没が江戸時代であるものと考えられる。しかし、掘削された時期が室町時代に遡る可能性が高く、ここでは第2遺構面に対応する遺構と捉えることとする。

[第2遺構面]（第9図、図版4） 第2遺構面は、遺物包含層(第4層)掘削後、第5層の上面(標高13.20m前後）において検出したものである。

遺構は、調査区北半部において建物に伴うとみられるピット列や土坑(SK-5～7)を検出し、また調査区南端において東西方向の溝(SD-6)を検出した。これらの遺構は、第4層および第5層出土の遺物からみて、平安時代から室町時代にかけての遺構と考えられ、その盛期は南北朝時代から室町時代頃にあるとみられる。

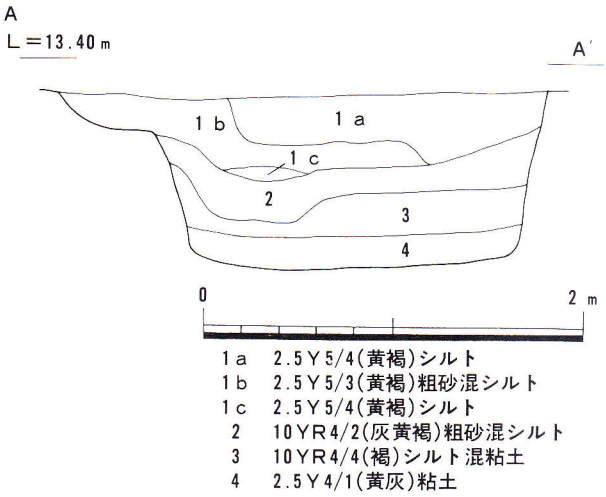
SD-6は調査区南壁に沿って東西に横切る溝であり、幅2.4m、検出面からの深さ60cm程度のものである（第7図、図版6下・7)。この溝の方向性は磁北N-70°-Wであり、その流路方向は底面の比高差より西から東であった可能性が高く、現存する溝とは逆の方向性であったことが推察できる。また覆土は大きく3層に分けられ、さらに第1層が上下に細分できる。まず第1層は黄褐色系の粗砂を含むシルト質で、上層に砂岩礫を少量含む。第2層は暗灰黄色のシルト混粘土、また第3層は黄灰色の粘土であり、ともに直径5～10cm大の砂岩礫を少量含む。この状況から下層ほど粘性が強くなる傾向がみられるレンズ状の堆積である。この遺構の覆土からは、多量の瓦や陶磁器が出土している。これらの遺物からそのほとんどが江戸時代以前の鎌倉時代から室町時代のものであるが、最下層の第4層から江戸時代初頭の唐津焼の皿が出土していることから、最終的に江戸時代の初頭まで残存していた遺構と考えられ、山口御殿以前の何らかの施設に関する溝の可能性が高い。



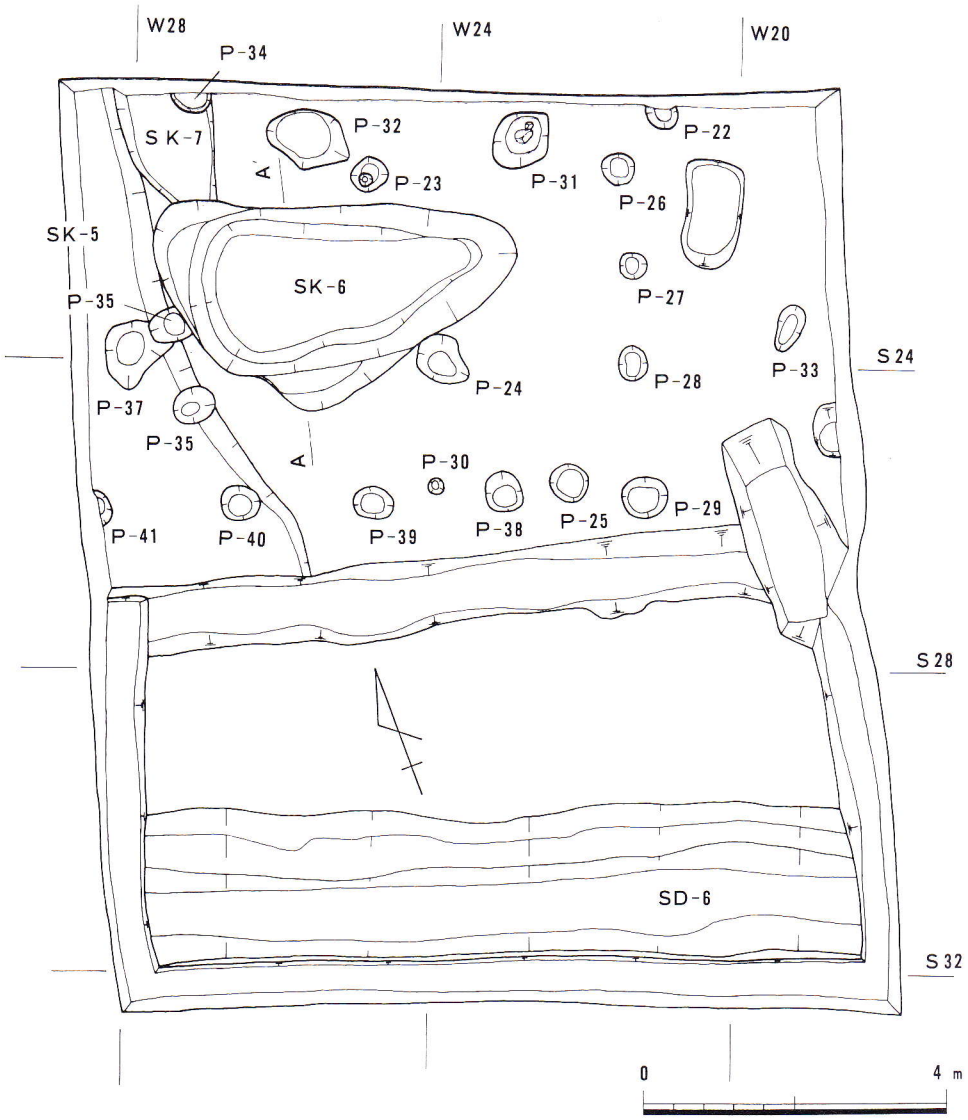
1a　2.5Y5/3(黄褐)粗砂混シルト(3～5cm大の礫を少量含む)
1b　2.5Y5/6(黄褐)粗砂混シルト
2　2.5Y4/2(暗灰黄)シルト混粘土(5～10cm大の礫を少量含む)
3　2.5Y4/1(黄灰)粘土(3cm大の礫を少量含む)

第7図　SD-6土層断面図

次に、土坑では調査区北西部において検出したSK-6がある(第8図、図版8)。この土坑は東西4.8m、南北2.7m、深さ90cm前後を測るものである。この土坑の覆土は大きく4層に分けられ、また第1層が3単位に細分できる。まず第1層は黄褐色系のシルト質で1b層にのみ粗砂が混入する。第2層は灰黄褐色系の粗砂混シルト、第3層は褐色のシルト混粘土で、最下層の第4層が黄灰色の粘土となり、下層ほど粘質が強くなる。この土坑の底面は基本層序の第7層(10Y4/1(灰)粘土)に達しており、常時湧水があった。このことから、本来素掘り井戸的な役割を果たしていた遺構とも考えられる。



第8図　SK-6土層断面図

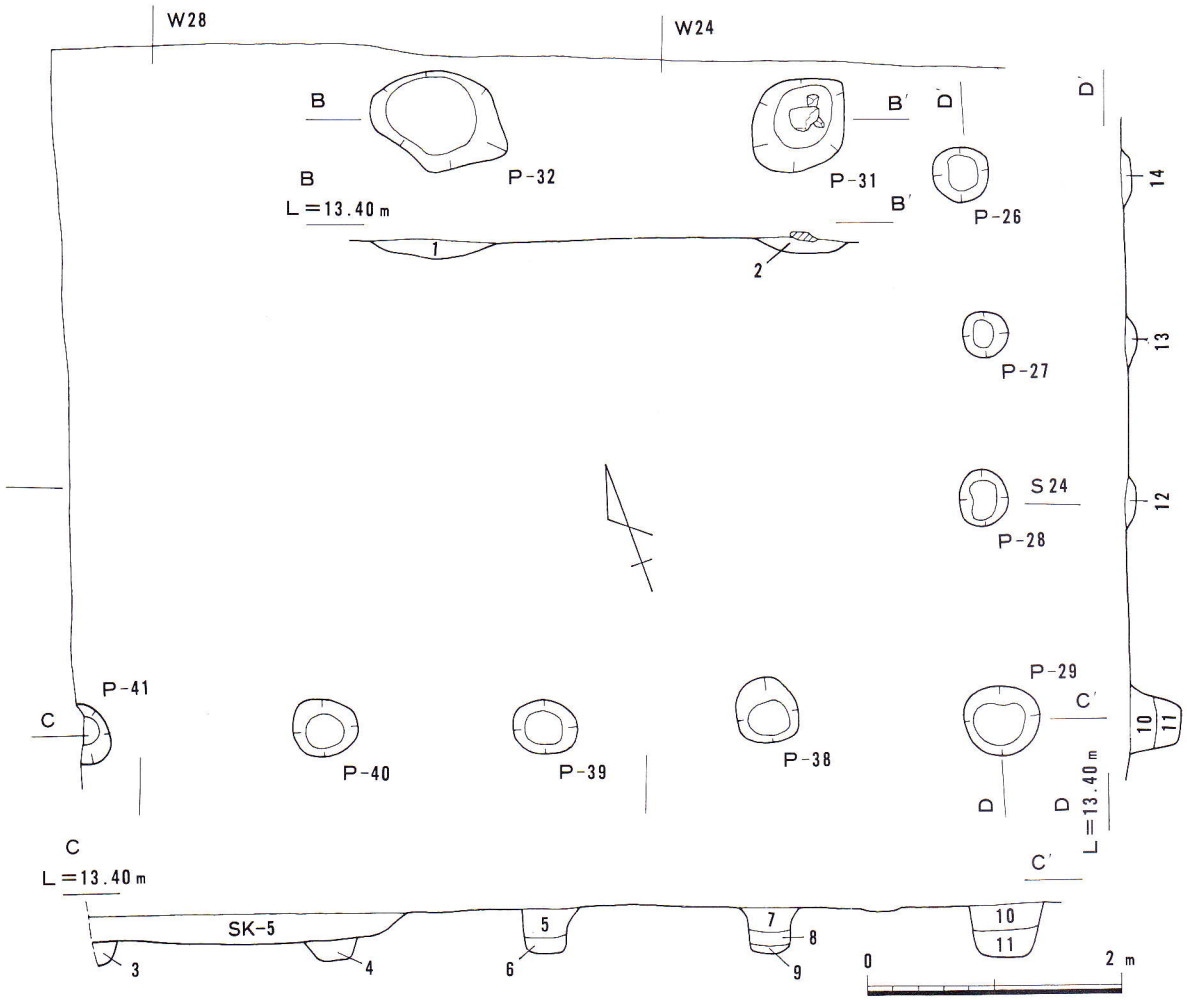


第9図　第2区第2遺構面遺構全体平面図

このほか、土坑では調査区の西端付近においてSK-5・7を検出した。SK-5は東西2.5m以上、南北6.5m以上を測る規模の大きなもので、西側への落ち込み状の遺構である。深さは西壁際の最深部で20cm程度を測る。またSK-7は東西1.2m、南北1.4m以上、深さ10cm程度を測るものである。

次に、建物に関係するとみられる遺構では調査区北半部において多くのピットを検出した。なかでも3条のピット列は等間隔に並ぶ規則性をもつものである（第10図、図版9・10）。

まずP-31・32は調査区北壁際において検出したもので、間尺2.8mを測る。このピット列の主軸は磁北N-70°-Wである。この2個のピットは直径70～100cmを測る比較的規模の大きな不定形のピットであり、10cm程度と浅く掘削されたもので、覆土は黄褐色のシルトに5cm大の砂岩礫が含まれるものである。この状況から、この2個のピットは根固め状のピットとみられ、本来上部には礎石が置かれていたものと考えられ、第4層などから多数出土する瓦より瓦葺きの礎石建物であったものとみられる。



1 2.5Y5/4(黄褐)シルト(礫を少量含む)
2 2.5Y5/4(黄褐)シルト(礫を少量含む)
3 2.5Y4/3(オリーブ褐)粗砂混シルト
4 2.5Y4/3(オリーブ褐)シルト混粗砂
5 2.5Y4/4(オリーブ褐)粗砂混シルト(礫を少量含む)
6 2.5Y4/3(オリーブ褐)粗砂
7 2.5Y4/3(オリーブ褐)粗砂混シルト(礫を少量含む)
8 2.5Y4/4(オリーブ褐)粗砂
9 2.5Y4/2(暗灰黄)シルト混粗砂
10 2.5Y4/4(オリーブ褐)シルト(礫を少量含む)
11 2.5Y4/3(オリーブ褐)粗砂混シルト
12 2.5Y5/4(黄褐)シルト
13 2.5Y5/4(黄褐)シルト
14 2.5Y5/4(黄褐)シルト

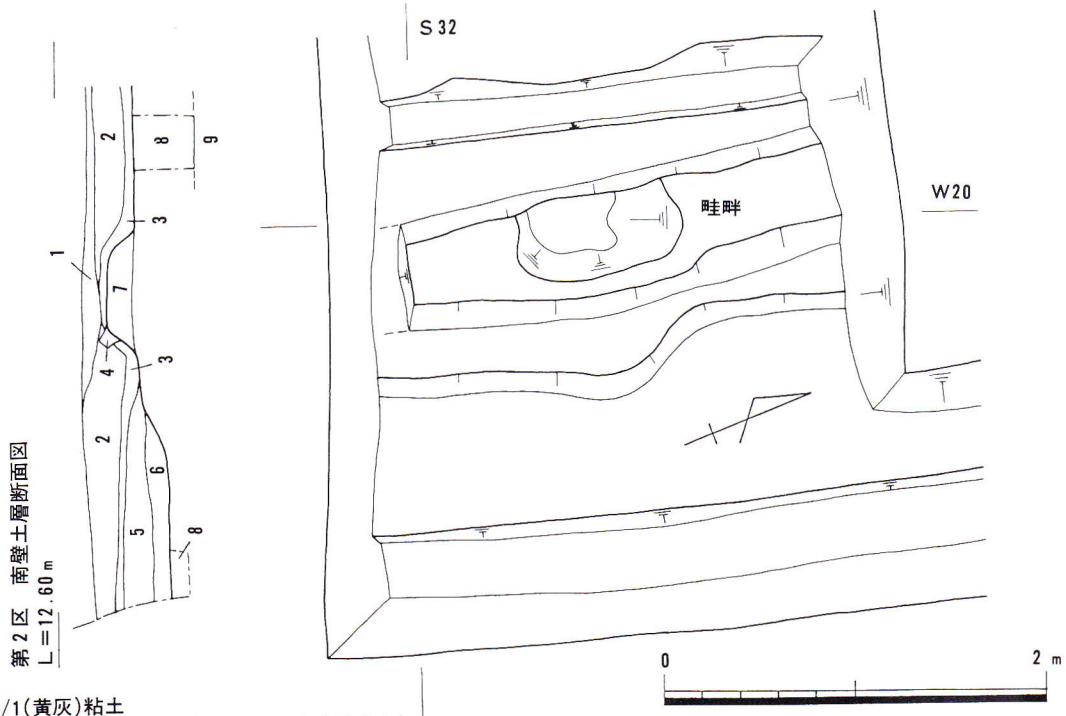
第10図　ピット列遺構平面図及び土層断面図

P-26～28はW22ｍライン上で検出した南北方向のピット列であり、間尺1.3ｍを測る。このピット列の主軸は磁北N-17°-Eである。この３個のピットは直径40cm前後を測る円形のピットであり、10cm程度と浅く掘削されたもので、覆土は黄褐色系のシルト質である。この状況から、この３個のピットは小規模ながらP-31・32と同様の根固め状のピットとみられ、礎石建物に伴うものと考えられる。

またP-29・38～41はS30ｍライン上で検出した東西方向のピット列であり、間尺はすべて1.8ｍを測る。このピット列の主軸は磁北N-70°-Wである。この５個のピットは直径50cm前後を測る円形のピットであり、30～40cm程度と深く掘削されたもので、覆土はオリーブ褐色系の粗砂を含むシルト質であり、２～３単位に分層できる。この状況から、この５個のピットは他のものとは異なり掘立柱建物や柵に伴うピット列と考えられる。しかし、その主軸がP-31・32に平行することやP-26～28にほぼ直交して並ぶことなどから一連の建物に伴うピット列と捉えることができる。

［第３遺構面］（第11図、図版11・12）　第３遺構面の調査は、まず調査区南半部において東・南・西壁直下に下層調査のための幅30～100cm程度のサブトレンチを設定した。このサブトレンチの状況から第６層の下面において灰色系の粘土層（第７層）を検出し、南壁W20ｍライン付近においてこの第７層上面に幅60cm、高さ12cm程度の畦畔状の高まりを検出した。このため調査区の南東隅に東西３ｍ、南北３ｍのグリッドを設定し、この部分において第３遺構面の調査を行った。

この結果、グリッドを南北に貫く畦畔を2.5ｍ分検出した。この畦畔は、基底部で幅60～70cm、上端部で幅30～40cmを測り、また高さは10～15cmである。この畦畔に伴う水田耕土は第11図の南壁土



1　第6ａ層　2.5Y5/1(黄灰)粘土
2　第6ｂ層　10YR4/3(にぶい黄褐)粗砂(3cm大の礫を多く含む)
3　　7.5YR5/6(明褐)粗砂(礫を含む)
4　　2.5Y4/2(暗灰黄)粘土ブロック
5　　5GY4/1(暗オリーブ灰)細砂
6　　10Y4/1(灰)粘土(5GY4/1(暗オリーブ灰)細砂をブロック状に含む)
7　畦畔　10YR4/1(褐灰)粘土
8　第７層　10Y4/1(灰)粘土
9　第８層　10G4/1(暗緑灰)粘土

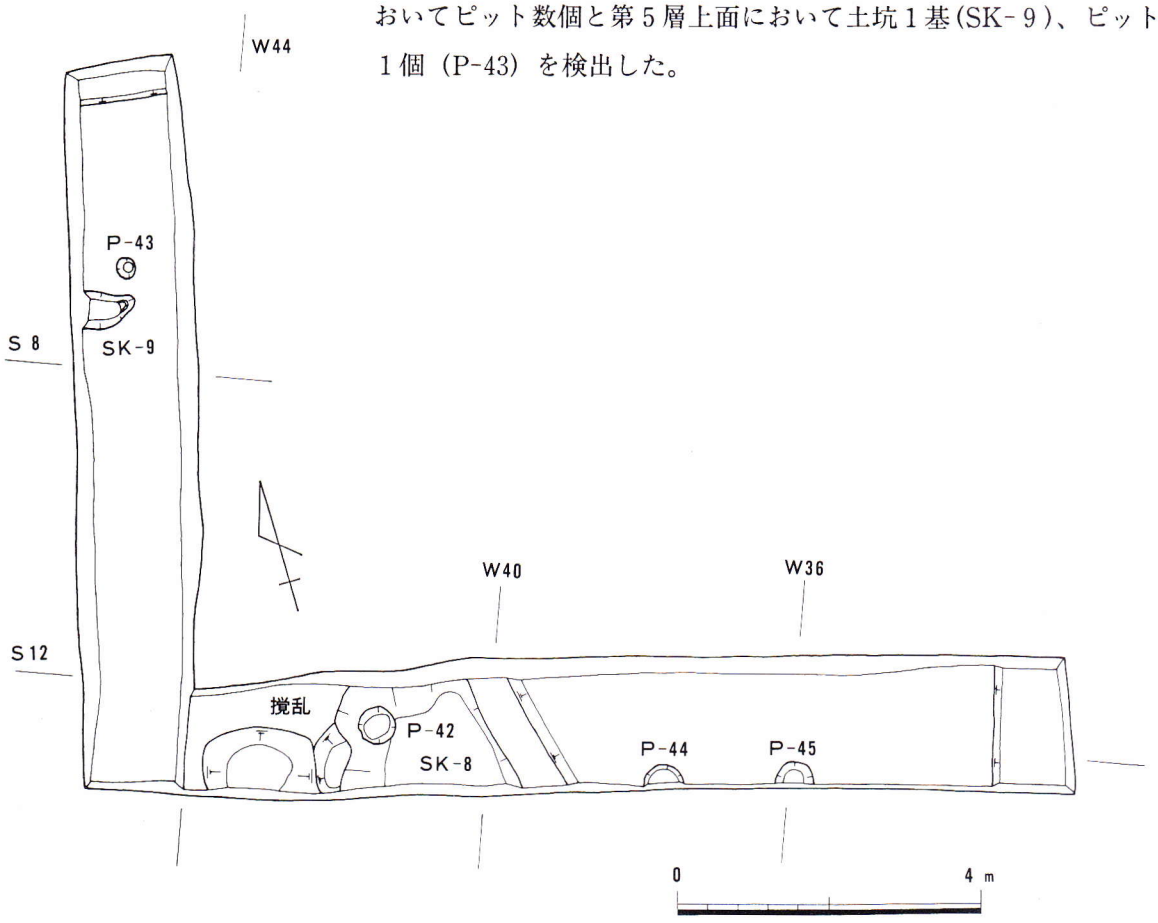
第11図　第２区南東隅グリッド第３遺構面遺構平面図及び南壁土層断面図

層断面図に示した５（５GY4/1（暗オリーブ灰）細砂）と考えられる。この層の直上に堆積する３（５YR5/6（明褐）粗砂）は、湧水に含まれた鉄分の影響により、錆化が強くみられる土層である。さらに、この畦畔から東側は10cm程度落ち込む部分（６）（10YR4/1（灰）粘土）があり、この土層からは遺物を検出することができなかったが、細砂をブロック状に含む灰色粘土であり、上層と同様水田耕作に伴う土壌の可能性が考えられた。この水田が機能していた時期は、直上の遺物包含層（第６層）の出土遺物が古墳時代の後期に比定できることと、下層の遺物包含層（第７層）の出土遺物が弥生時代後期とみられることから、少なくとも弥生時代後期から古墳時代後期の範疇におさまるものとみられる。

(3) 第３区の遺構（第12図、図版５）

第３区において検出した遺構は、まず東西方向のトレンチにおいて第３層上面から掘り込まれた土坑(SK-８)を検出した。この土坑は東西2.2m、南北1.4m以上を測る不定形のもので、深さ30cm程度を測る。この土坑は江戸時代末期頃のものとみられる。また第４層上面ではピット１個(P-44)を検出した。このピットは直径50cm程度の円形のもので、黄褐色系の粗砂の覆土をもつ深さ20cmのものである。さらに下層の第５層上面においてもピット１個(P-45)を検出した。このピットは直径50cm程度の円形のもので、多くの砂岩礫を含む黄褐色系の粗砂の覆土をもつ深さ25cmのものである。

また最も西側に位置する南北トレンチの調査では、第４層上面においてピット数個と第５層上面において土坑１基(SK-９)、ピット１個（P-43）を検出した。



第12図　第３区遺構全体平面図

6．遺物

今回の調査で出土した遺物は、遺構の覆土や第１～７層の堆積層より弥生時代後期から江戸時代に至る時期のものを検出した。

まず弥生時代から古墳時代の遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての壺・甕・高杯・甑などが、古墳時代中期から後期のものでは、土師器や須恵器が少量出土した。奈良時代から平安時代のものでは土師器の杯・皿や須恵器の蓋杯・壺、黒色土器、中国製の白磁碗などがあり、また鎌倉時代から室町時代のものでは、土師器の皿や釜、瓦器椀や瓦質土器の甕・鉢、また輸入陶磁器である中国製の青磁、染付の碗・皿・盤が一定量出土した。国産の陶磁器では瀬戸・美濃系の灰釉皿や天目茶碗、備前焼の盤・壺・すり鉢、丹波焼の壺などがある。また室町時代のものとみられる瓦が多数出土た。江戸時代の遺物は比較的少なく唐津焼の皿、肥前系の染付碗や丹波焼のすり鉢が出土した。また瓦も一定量の出土をみた。

土器以外の遺物では、石製品である火打石や砥石、銭貨である寛永通宝などがある。また全体的に焼土の出土が目立った。自然遺物では鎌倉時代の遺構（SK-６）や古墳時代の堆積層（第６層）から桃の種子が出土した。

本書では、これらの遺物を大きく各時代に分類してふれ、そのなかで輸入陶磁器や国産陶磁器などを個別にまとめた。また瓦や石製品、銭貨などは、最後に記述した。

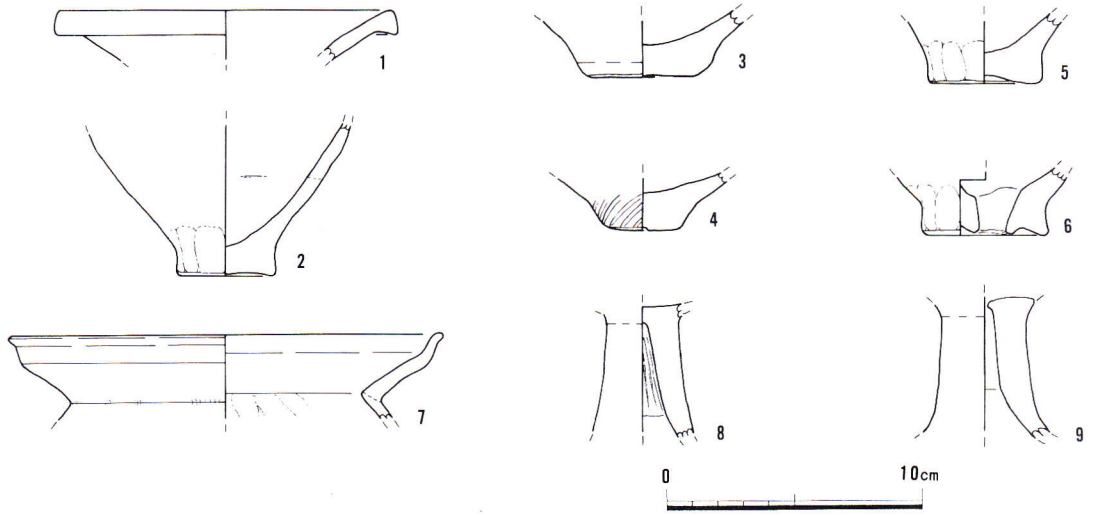
(1) 弥生・古墳時代の土器（第13図、図版17上）

１～６は弥生時代後期の土器である。

１は口径13.1cmを測るやや小型の広口壺の口縁部である。大きく開く口縁端部は下方に肥厚し、外端面を形成する。

２・３は壺の底部とみられ、内外面とも指ナデによる調整が微かに観察できる。また底部周辺の外面には指頭圧痕がみられる。これらの底径は、２が3.7cm、３が4.1cmである。

４・５は甕の底部とみられる。４の外面には右上がりのタタキ痕が、５には指頭圧痕が明瞭に観察できる。これらの底径は、４が2.8cm、５が4.7cmをそれぞれ測る。６は甑の底部である。この底部は底径4.6cmを測るやや上げ底状のもので、ほぼ中央部には直径1.1cmの円孔が内面から穿たれて



第13図　遺物実測図１

いる。

これらの胎土は比較的精良なものが多く、石英が少量含まれるもののほか、赤色軟質粒が目立つ程度である。また甕（４）には結晶片岩が含まれている。焼成は、全体的に軟質のものが多く、ほとんどが赤褐色から淡赤褐色の色調をもつ。また５は他のものとは異なり、暗赤褐色の色調である。

７～９は古墳時代の土器である。

７は口径16.9cmを測る二重口縁壺の系譜をひく壺の口縁部であり、口縁端部約1/3を内側に屈曲させ、さらに端部をやや外反させている。この壺の口縁部周辺は強いヨコナデ調整によりシャープに仕上げ、頸部下の外面にタテ方向のハケ調整を施したのちナデ消していた痕跡がみられる。

８・９は高杯の脚部である。これらの外面には指ナデによる調整が施され、また８の内面にはシボリ目痕が顕著にみられる。

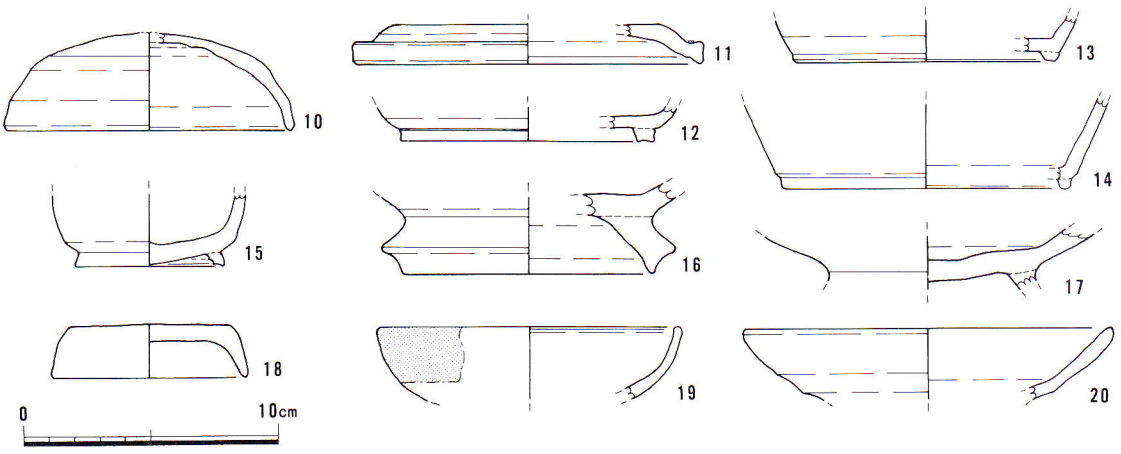
これらの胎土には少量の砂粒が含まれ、８に石英・結晶片岩が多く含まれている。また焼成は、軟質のものが多く、すべて淡赤褐色の色調をもつが、７の内面のみ黒褐色の色調である。

これらの出土位置は、第１区の第５層（５・７）、東側落ち込み（８）、第２区の第１層（６）、第４層（１）、第６層（９）、第３区の第３層（３）、第４層（２・４）である。

(2) 奈良・平安時代の土器（第14図、第16図（41）、図版17下、図版19上（41））

10～14は須恵器の蓋杯である。杯蓋（10）は口径10.1cm、器高3.8cmを測る焼き歪みが著しいものである。天井部約1/3は回転ヘラケズリののちこれをナデ消している。この蓋はこの一群では最も古いものであり、７世紀の初頭頃に位置づけられるものである。杯蓋（11）は天井部がほぼ水平となり、その端部が「Z」状に屈曲するタイプのものである。また欠失している天井部中央には擬宝珠様のツマミが付くとみられる。杯身（12）は底径9.9cmを測るもので、貼り付けによるしっかりとした高台が付くものである。また杯部の立ち上がりがやや丸みをもつ。この杯身は11と同じタイプの蓋とセット関係になるもので、８世紀の中葉頃のものとみられる。杯身（13・14）はやや小さな高台が貼り付けられるもので、その杯部は高台から直に立ち上がる。これらは12よりやや後出するもので、８世紀後葉頃のものとみられる。

15～17は須恵器の壺底部とみられる。15は小型壺の底部とみられ、貼り付けによる高台はやや「ハ」の字状に開き接地する。また16・17は大型壺の底部であり、15と同様に貼り付けによる高台は大き



第14図　遺物実測図２

く「ハ」の字状に開き接地するタイプである。

18は口径7.6cm、器高2.1cmを測る須恵器の蓋とみられる。

以上の須恵器の胎土には少量の白色砂粒や黒色砂粒が含まれている。また焼成は、硬質で灰色の色調をもつもの（10・11・15）とやや軟質で淡灰色の色調をもつもの（13・14・16～18）がある。

19は口径11.8cmを測る土師器杯である。口縁端部はやや内側に丸く肥厚させ段を成す。調整は全体的に強いヨコナデによってシャープに仕上げている。また体部外面上半部に黒褐色の黒斑がみられる。この杯は器形などから奈良時代に比定できるものとみられる。

20は口径14.3cmを測る土師器皿とみられる。この皿には欠失している底部に高台が付くものとみられ、体部は強いヨコナデによって段を成す。この皿はその器形から平安時代に比定できるものとみられる。

輸入陶磁器には中国製の白磁碗（41）がある。この碗は口径16.8cmを測るもので、口縁端部はやや外反し、上端部に面をもつ。色調は灰白色を呈し、緻密な胎土をもつ。

これらの出土位置は、第2区の第1層(11)、第2層(16)、第3層(15)、第4層(18)、SD-4(13)、SD-6（10・14・17)、P-10（12)、第3区の第1層（41)、第4層（19・20）である。

(3) 鎌倉・室町時代の土器（第15図～第17図、図版18～20）

［土師器］(第15図、図版18)　まず土師器には皿（21～32）と釜（33～36）がある。

土師器皿では、まずその器形より口縁部が強いヨコナデによって斜め上方に外反気味に立ち上がるもののうち底部の成形がヘラ切りによるもの（21～24）がある。このタイプの皿は、特に口径に比べ器高が1：0.19～0.24となり、比較的深い皿であり、口径10.0～11.0cmを測るもの（21・22）と口径7.0～8.0cmを測るもの（23・24）がみられ、これらは大小のセット関係にあるものとみられる。また前者と同じ口縁部をもち、底部の調整が指頭圧痕によるもの（25）がある。この皿は口径8.2cm、器高1.3cmを測る比較的小型で浅いタイプのものである。また底部からの立ち上がりが緩やかに丸みをもち、なおかつ口縁端部が内彎するもの（26・27・31）と外反するもの（28・29・32）がある。これらは口径に比べ器高が1：0.14～0.19となり、比較的浅い皿である。このタイプの皿は口径10.5cm前後を測るもの（31・32）と口径8.0～9.0cmを測るもの（26～29）があり、これらも大小のセット関係にあるものとみられる。また口縁部が上方に肥厚して突出するもの（30）が1点あり、口径7.6cm、器高1.5cmを測る比較的小型のものである。

これらの胎土は比較的緻密であり、少量の赤色軟質粒が含まれている程度である。また焼成は、やや軟質のものが多く灰白色から赤褐色の色調をもつ。

次に、土師器釜（33～36）はすべて口縁部周辺の破片である。これらはすべて口縁部がヨコナデによって大きく「く」の字状に屈曲するものである。また口縁端部は、内側に折り曲げた部分を比較的丸くおさめるもの（33）や上方に突出させるもの（34)、やや外反気味に上方に突出させるもの（35）などがあり、これらは口径28.0cm前後におさまる。また36は口径24.4cmを測るものであり、他のものに比べ大きく折り曲げた口縁部を肥厚させる特徴をもつ。

これらの胎土は比較的粗雑であり、石英、雲母を含むもの（33～35）や石英、赤色軟質粒が含まれているもの（36）がある。また焼成は、比較的軟質で褐色の色調をもつ。

これらの出土位置は、第1区の第1層(26)、第2区の第2層(22)、第3層(23・28・31・33～35)、

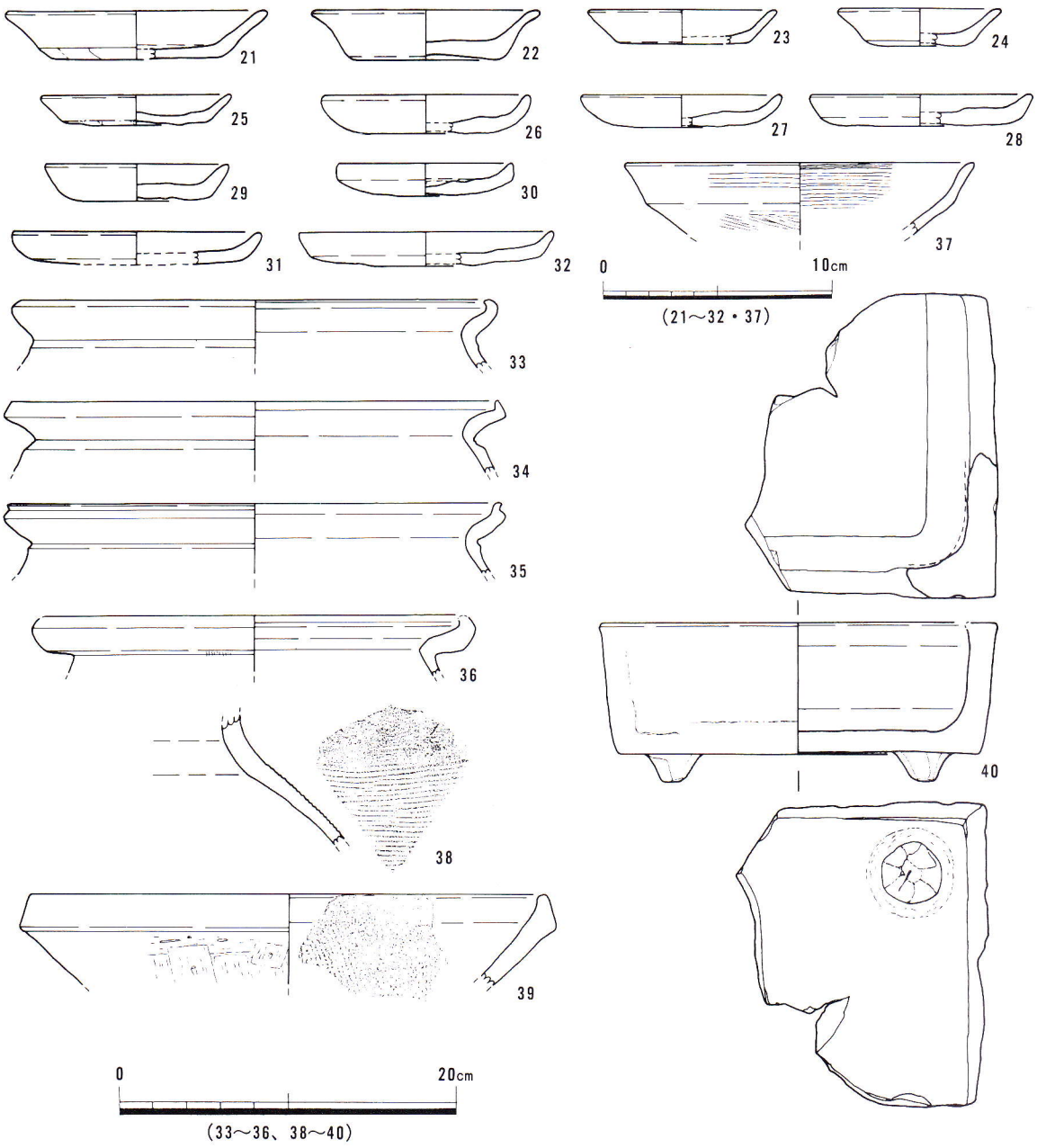
第４層（25）、SD-６（21・27・29・30・32・36）、SK-６（24）である。

［瓦器］（第15図、図版18）　瓦器には第１区の第３層から出土した口径15.1cm、残存高3.2cmを測る椀（37）がある。体部と口縁部の境目は、強いヨコナデによって段を成す。その下部には指頭圧痕が観察できるが、内外面とも丁寧なヘラミガキ調整によってこれを消している。

［瓦質土器］（第15図、図版18）　瓦質土器には甕（38）、すり鉢（39）、火鉢（40）がある。

38は破片のため全体を復元できないが、大型の瓦質甕肩部とみられる。体部には成形時の平行タタキが明瞭に残り、頸部周辺のタタキを指ナデによって消している。

39は口径30.0cm、残存高5.3cmを測るすり鉢である。このすり鉢の調整は口縁部周辺にヨコナデ調整を施し、また体部外面にタテ方向のヘラケズリ調整を行っている。内面にはクシ目が摩滅する程



第15図　遺物実測図３

の使用痕が観察できる。

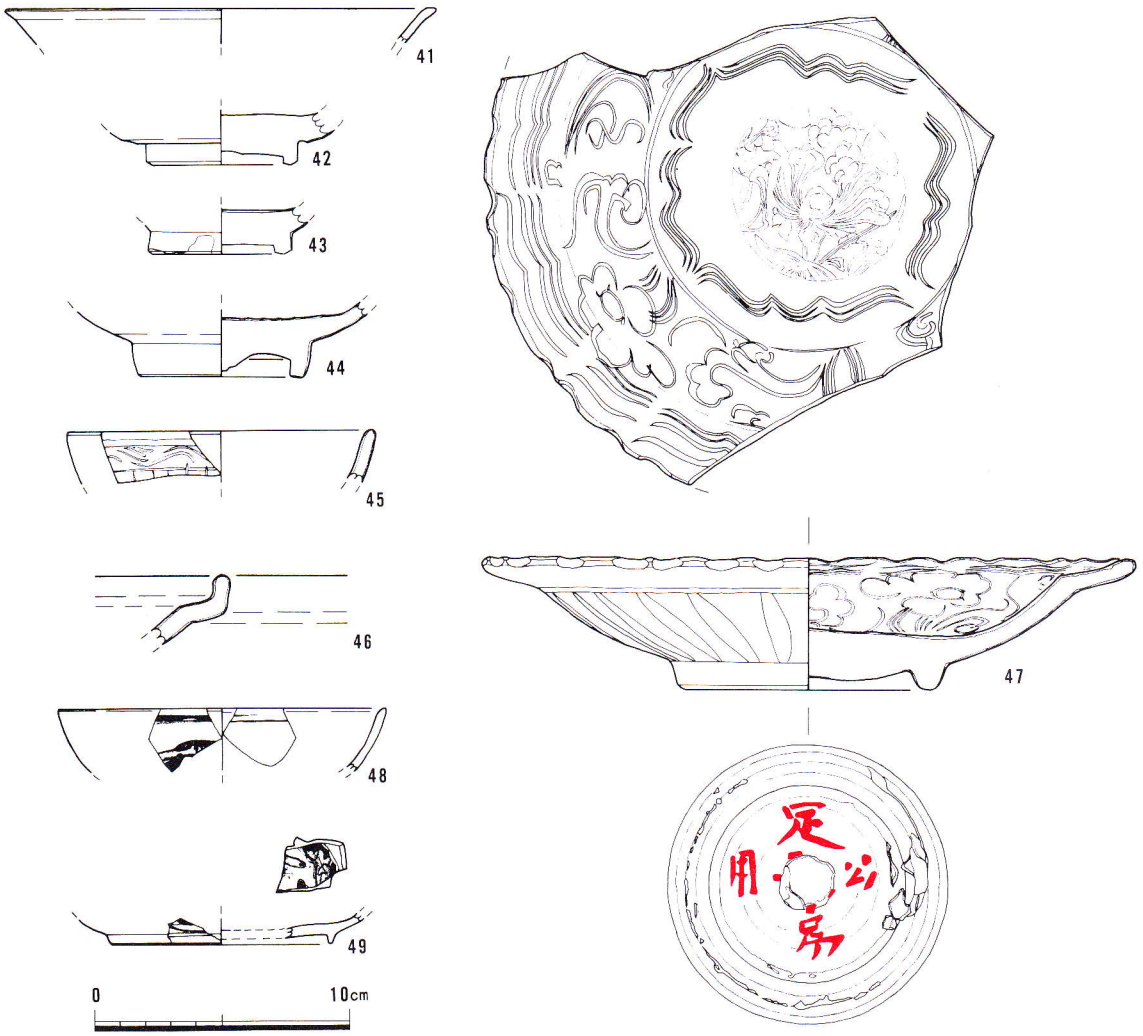
40は瓦質の火鉢である。この火鉢は復元すると一辺23.1cmの正方形を呈するとみられ、器高9.3cmを測り、底部には直径3.3cm、高さ1.6cmの円錐状の支脚が４ヶ所付くものである。

これらの胎土ではすべてに２mm大の砂粒を少量含む。含有される鉱物は38にチャート・石英が、39に石英が、40に赤色軟質粒がそれぞれ観察できる。また焼成は、すべてが比較的軟質である。また色調は暗灰色のもの（39・40）と黒褐色のもの（38）がある。

これらの出土位置は、第２区の第２層（40）、SD-６（39）、SK-６（38）である。

［輸入陶磁器］（第16図、図版19・20）　輸入陶磁器には中国製の青磁碗（42～45）、青磁盤（46・47）、染付碗（48）、染付皿（49）がある。

まず青磁碗では、底部周辺の破片で竜泉窯系のもの（42～44）がある。これら底部は、すべて削り出しによる高台をもつもので、底径は42が5.4cm、43が5.2cm、44が6.3cmをそれぞれ測る。高台内側はすべて無釉で明褐色の露胎である。また43は体部周囲を円板状に打ち欠き、他のものに転用したとみられるものである。45は碗の口縁部であり、口径12.0cmを測るもので、外面に細線で蓮弁文を施している。この碗はなかでも最も新しい時期のものである。青磁盤(46・47)では口縁部を「く」の字状に外反させ、さらに端部を上方に引き上げたもの（46）と口縁部を「く」の字状に外反させ



第16図　遺物実測図４

たもの（47）がある。47は口径25.2cm、底径9.6cm、器高5.2cmを測るもので、外面に幅広の蓮弁文をもち、内面にはヘラ描きによる草花文が施されている。また見込み部にはスタンプによる牡丹が描かれている。また高台部は全面に施釉後、内面を輪状に削り取ったもので、内部に朱書きによる「定□為公用」とみられる文字が書かれている。

これらの青磁の色調は、淡緑色に発色するもの（42）、淡青色に発色するもの（43・45）、緑灰色に発色するもの（47）などがあり、44・46については二次的な焼成を受けているため表面が白く変色している。

染付には明代の碗（48）、皿（49）がある。碗（48）は口径12.8cmを測るやや内彎するタイプのものである。皿（49）は底径8.6cmを測るもので、全面に施釉後、高台畳付部の釉を削り取っている。この皿の見込み部には鳥が描かれている。これらはともに呉須の発色が良好なもので暗青色に発色する。

これらの出土位置は、第2区の第1層（49）、第3層（42・43・46）、第4層（47）、SD-6（45）、SK-6（44・48）である。

［国産陶磁器］（第17図、図版19） 国産陶磁器には瀬戸・美濃系の灰釉皿(50～52)、天目茶碗(53・54)、壺（55）や備前焼の盤（58）、壺（60）、すり鉢（61～63）、丹波焼の壺（59）などがある。

まず瀬戸・美濃系の灰釉皿では高台をもつタイプのもの（50）ともたないタイプのもの（51・52）があり、それぞれの口径は50が10.7cm、51が9.6cm、52が7.0cmを測る。50は焼成時に傾いていたためか内面の端に3㎜程度の厚みの釉が溜まっており、また高台内部に重ね焼きによる釉着の痕跡が残る。51は全面に施釉後、見込部と高台部の釉を輪状に削り取るものである。また色調は50が灰緑色に発色するが、51・52は二次的な焼成を受けており、このため本来の色調は失われ表面剝離がみられる。天目茶碗では53・54ともに褐釉のもので、高台周辺の外面は露胎となる。また高台は削り出しによるもので、底径はともに4.5cmを測る。55は底径9.6cmを測る褐釉の壺底部とみられ、外面の体部下半を除き施釉する。

次に、備前焼の盤では口縁端部を上方に突出させたもの（58）がある。壺ではほぼ垂直気味に立ち上がる口縁端部をやや外反させ、外側に折り曲げ丸くおさめたもの（60）などがある。すり鉢では口縁部2点（61・62）、底部1点（63）がある。61は垂直気味に立ち上がる比較的器壁の薄い口縁部をもち、幅広の外端面に強いナデによる沈線状のラインが1条めぐる。62は61に比べかなり肉厚な口縁部で外端面の沈線が2条めぐる。63は底径12.0cmを測る底部である。これらすり鉢の内面にはクシ目が施されており、63から1単位が11条/2.5cmであることが観察できる。

59は口径21.4cmを測る丹波焼の壺であり、大きく開く口縁端部を外側に折り曲げ丸くおさめたものである。

これらの出土位置は、第1区の第3層（59）第2区の第2層（54）、第3層（50・51・53・58）、第4層（60）、SD-4（63）、SD-6（55・56・62）、SK-4（52）、SK-5（61）である。

（4）江戸時代の土器（第17図、図版19）

今回の調査において江戸時代の土器は全体的に希薄である。

56は唐津焼の皿である。この皿の体部下半は回転ヘラケズリ調整を行い、高台を削り出している。この皿は外面の体部下半を除き施釉し、淡灰色に発色する。

55は外面に菊文が描かれた伊万里の染付丸碗である。この碗は二次的な焼成を受けているため表面が白く変色している。

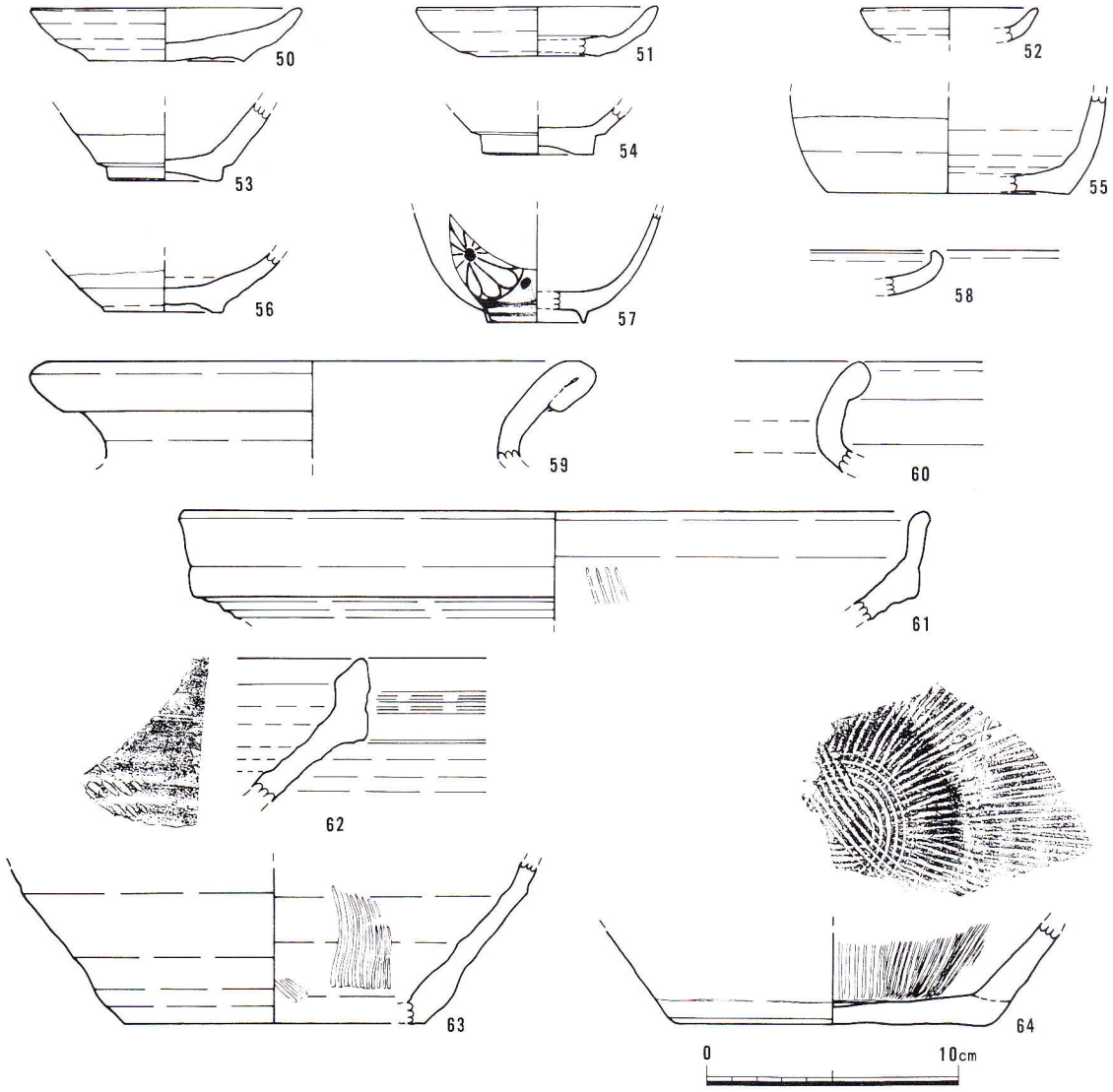
64は底径12.4cmを測る丹波焼のすり鉢である。このすり鉢の内面にはクシ目が密に刻まれ、クシ目が磨滅する程の使用痕が観察できる。また外面が淡褐色に発色するが、内面は淡灰色の色調であり、底部に自然釉が付着している。

これらの出土位置は、第2区の第2層（57）、SD-6（56）、第3区の撹乱（64）である。

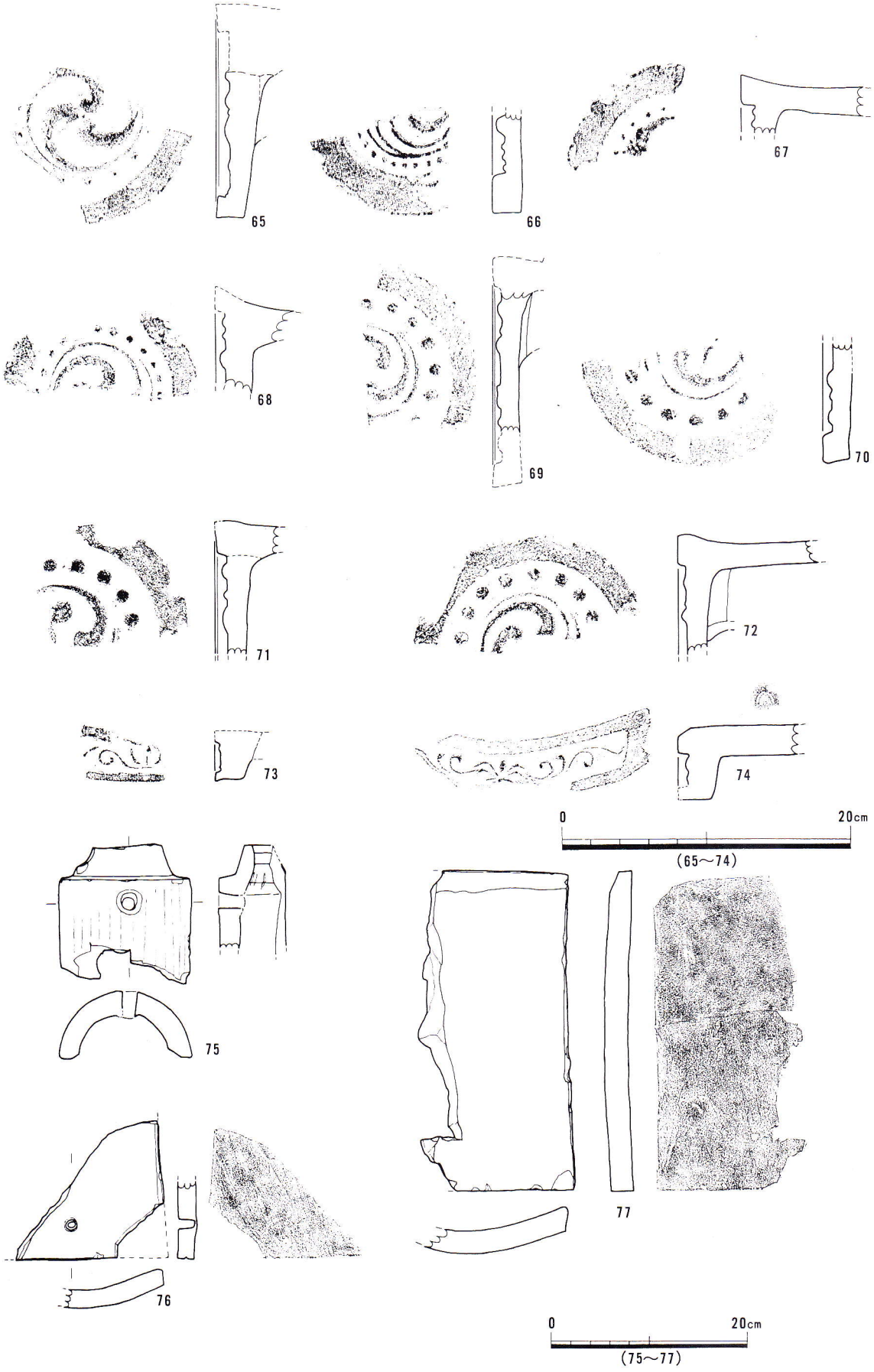
(5) 瓦（第18図、図版21・22）

瓦は江戸時代のものとそれ以前のものとに大きく分けられる。

まず古いタイプの軒丸瓦（65～68）では左巻きの三巴文軒丸瓦（65・66・68）と右巻きの三巴文軒丸瓦（67）があり、これらは巴の尾部が長く圏線状につながるものである。65は瓦当面の径14.8cmを測り、連珠文は径3㎜と小さく、比較的少ない15個程度の数をもつものとみられ、巴の中心に径3㎜珠文が一個付くものである。66は瓦当面の径14.8cmを測り、連珠文は径6㎜と小さく、30個を数える比較的多くの珠文をもつものである。また67・68は瓦当面の径13.5cm前後を測り、径6～7㎜の連珠文をもつもので、24個程度の数とみられる。新しいタイプの軒丸瓦（69～72）ではすべて



第17図　遺物実測図5



第18図　遺物実測図 6

左巻きの三巴文軒丸瓦であり、前者に比べ巴の尾部が短いものである。これらは、連珠文の径が1.2cm前後と大きいもので、珠文の数が15個前後の数のもの（69～71）と18個のもの（72）がある。また瓦当面の径は15.0cm前後を測るもの（69～71）と16.6cmを測るもの（72）があり、ともに外区幅が2.0cm前後となる。これらの軒丸瓦では古いタイプのもので室町時代に比定できると思われるが、65・66についてはさらに遡る可能性があるとみられる。また新しいタイプのものは、江戸時代のものとみられる。

次に、73・74はともに均等唐草文軒平瓦であり、ともに江戸時代のものとみられる。73は瓦当面の厚さ3.4cmを測る比較的幅の狭いものである。また74は瓦当面の厚さ4.4cmを測る比較的肉厚のもので、上端に面取りがみられ、上部の平瓦部に「U」の字に似た刻印が施されている。

75は丸瓦である。残存長13.5cm、幅13.6cm、高さ7.0cmを測り、直径1.5cmを測る釘孔が上面から穿たれている。また外面にはヘラケズリが面取り状に施されている。この瓦は他のものに比べ焼成があまく、黄褐色の色調である。

76・77は平瓦である。76には直径1.2cmを測る円孔が上面から穿たれているが、下面には達していない。77は長さ32.9cm、残存幅15.5cm、高さ4.8cmを測るもので端部に面取りが成されている。これらの瓦の焼成は良好であり、特に77は須恵質に焼成されたものである。これらの時期は、軒丸瓦の古いタイプに併行するものとみられる。

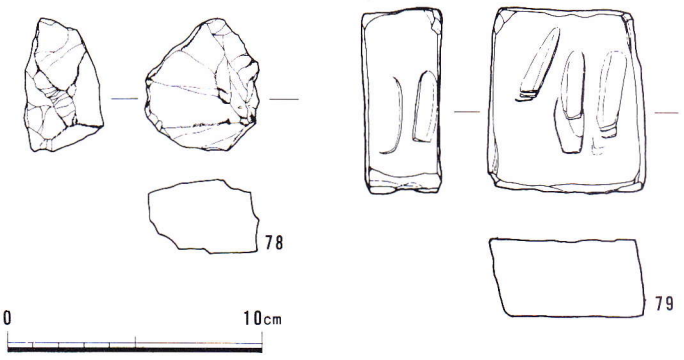
これらの出土位置は、第2区の第2層(69・70・72)、第3層(65・73～76)、SD-6(66・68・77)、SK-2（67)、第3区の撹乱（71）である。

上記以外の瓦では、桟瓦の側面に「海草郡紀伊村田中製瓦所」とスタンプされたものが第2区のSD-2から1点出土している。

(5) 石製品（第19図、図版22）

78は石英を石材とした長さ5.3cm、幅4.4cm、厚さ2.8cmを測り、重量86.4ｇの火打石とみられる。この火打石は、比較的角張った自然石を用いたものであり、打撃痕が微かだがほぼ全面に観察できる。

79は良質の砂岩を用いた砥石である。この砥石は長さ7.2cm、幅6.3cm、厚さ3.0cmを測り、重量260ｇのもので、側面の全面に使用痕が明瞭に観察できるもので、そのうち二面には刀子状のものを研磨したものか溝状に鋭く窪んでいる。

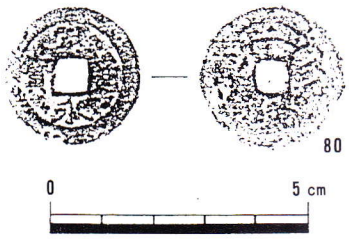


第19図　遺物実測図7

これらの出土位置は、第2区の第1層（79)、第3層（78）である。

(6) 金属製品（第20図、図版22）

金属製品には銭貨である寛永通宝（80）が1点出土している。



第20図　遺物実測図8

この寛永通宝は、直径2.8cmを測るもので、背面には背十一波がある。この寛永通宝の出土位置は、第１区の第３層である。

【参考文献】
『貿易陶磁研究第２号』　日本貿易陶磁研究会　1982年
中世土器研究会　『概説中世土器・陶磁器』　真陽社　1995年
田口昭二　『美濃焼』考古学ライブラリー17　ニューサイエンス社　1983年
森郁夫　『瓦』考古学ライブラリー43　ニューサイエンス社　1986年

７．まとめ

(1) 第２区第３遺構面検出の水田遺構について

和歌山県内においてこれまで検出されている古墳時代以前の水田遺構は、和歌山市及びその周辺地域において数例報告されている。これらは、検出した土壌についてプラント・オパール分析を行い、イネをはじめとするイネ科栽培植物のプラント・オパールを一定量検出したものであり、なかには、水田区画を明らかにしたものや水口・畦畔等の遺構が検出されたものなどがある。

このなかで最古とされる報告例は、和歌山市の太田・黒田遺跡第26次調査で検出された水田であり、弥生時代中期に比定されている。この水田は、集落の縁辺部に相当する微高地上でもやや低地にあたる西側に位置し、弥生時代中期前葉から中葉にかけての３時期にわたる水田面を検出している。この水田の特徴は、調査区のほぼ中央を東西に貫くＮ－86°－Ｗの方向性をもつ幅４m程度のいわゆる大畦畔と大畦畔に直交する南北方向の小畦畔があり、これらの畦畔は、約60cmの床上げにも関わらず３期ともに踏襲されていたとみられている。また、水田に入水する水口が１期と３期ではほぼ同位置であり、水口も踏襲される可能性が高いとみられている。また３期(弥生時代中期中葉)の水田に単一的な水田（長辺7.8m、短辺3.3m）があり、小区画水田の一例としてあげられる。(註1)

次に、古墳時代の水田では同じく和歌山市の鳴神Ｖ遺跡で検出された古墳時代前期の水田が報告されている。この水田の特徴は、微高地と微低地の境目に微高地に沿って用水路と畦畔がもたれ、その微低地部に小区画水田（１単位は長辺4.0～6.15m、短辺1.75～2.30m）が８単位南北に並ぶものであり、水の管理の比較的容易な場所での乾田あるいは半乾田であったものと推定されている。(註2)

これらの水田調査では、プラント・オパール分析を行い、耕土であったとみられる土壌からすべてイネのプラント・オパールが検出されている。

山口遺跡では、当調査地から約100ｍ北側に位置する第５次調査において弥生時代後期を中心とした遺構・遺物を多数検出し、集落の一端を明らかにしている。この状況から当調査地の北側の丘陵部は集落の中心部と推定され、当調査地は集落の縁辺に相当する微低地部であるとみられる。

今回の調査で検出した水田遺構は、第２区第３遺構面で検出したもので、直上の遺物包含層（第６層）の出土遺物が古墳時代の後期に比定できることと、下層の遺物包含層（第７層）の出土遺物が弥生時代後期とみられることから、少なくとも弥生時代後期から古墳時代後期の範疇におさまるものとみられる。この水田遺構の特徴は、まずグリッドを南北に貫く畦畔の高まりを2.5ｍ分検出し、その東側の第６層下に水田土壌と考えられる堆積（5GY4/1（暗オリーブ灰色）細砂）（第11図南壁土層断面図（５））を検出したものである。また、畦畔から東側はさらに10cm程度落ち込む部分（同断面図（６））があり、この土層からは遺物を検出することができなかったが、細砂をブロック状に

含む灰色粘土であり、(5)と同様水田土壌の可能性が考えられた。この水田遺構の広がりは第2区南壁に沿って設定した下層調査のためのサブトレンチ内において、西側には東側と同じ堆積を検出し、またSK-6の底面下層において同様の土壌を検出していることから、水田は第2区ほぼ全体もしくはそれ以上の広範囲に広がるものとみられる。しかし、水田遺構上層の堆積(基本層序の第5層)が平安時代頃の土石流等によって一気に堆積した自然堆積層と考えられることから、水田遺構の正確な構造等の情報は失われている可能性が指摘できる。

(2) 中世における遺構・遺物の検討

まず文献資料から山口遺跡周辺をたどると、山口氏自身の文書は伝わっていないが、和歌山市田屋の「森家文書」康永二(1343)年の条に「山口与一入道明教」の名がみられ[註3]、南北朝時代前期に守護被官であったことが記されている。また『大乗院寺社雑事記』の明応二(1493)年の条に「山口城」の記載がみられ、畠山尚順が在城していたことが記されている[註4]。

今回の調査において出土した鎌倉時代から室町時代にかけての遺物は、比較的多くを数えることができる。これらの遺物には輸入品である中国製磁器をはじめ、瀬戸・美濃系、備前、丹波などの国産陶磁器や土師器、瓦質土器、瓦などがある。これらを時期的にみると、まず輸入磁器では12世紀代から16世紀末までの広範囲の遺物が認められる。また国産陶磁器では、瀬戸・美濃系の天目茶碗・灰釉皿や備前焼の壺・すり鉢・盤などが多くを占め、これらから16世紀代に集中する傾向がみられるが、他の土師器などから輸入磁器と同じ広範囲の遺物群であるものとみられる。また出土した土器に共伴するものに多量の瓦がある。これらの瓦は、ほとんどが室町時代のものとみられ、この室町時代に瓦葺きの建物が存在していたものとみられる。しかし、なかには鎌倉時代に遡れる可能性を残すものが一定量含まれていることから瓦葺きの建物が鎌倉時代に存在した可能性も考えられる。

これらの遺物は今回の調査における第2遺構面に対応するもので、遺構には建物に伴うとみられるピット列や土坑(SK-5～7)がある。特に、建物に伴うとみられるピット(P-26～28・31・32)は根固め状のピットとみられ、礎石建物に伴うものと考えられる。この建物に伴うとみられるピットには覆土中にほとんど遺物が含まれておらず正確な時期は不明であるが、遺構の重なりからみてP-40・41⇨SK-5となり、SK-5から出土した備前焼すり鉢(第17図、61)は16世紀前半に位置づけられることから、ピット群は少なくとも16世紀前半以前のものと考えられる。またSK-6には中国製の染付碗(第16図、48)が出土していることから少なくとも16世紀中葉以降であるものとみられ、ピット群に後出する遺構であるものと考えられる。

以上のことから、比較的古い遺構として礎石建物に伴うとみられるピット群があげられ、これらの正確な時期は不明であるが、多量に出土した瓦からみて瓦葺きの建物であったものとみられる。

また特殊なものとして高台内部に朱書きによる「定□為公用」とみられる文字が書かれている13世紀後半から14世紀前半頃の中国製青磁盤(第16図、47)がある。

山口及び里地域は、古代の官道である南海道が東西に横切り、「名草駅」が置かれていたところとされる。また北側に位置する雄ノ山峠から南北に横切る熊野街道が交わる交通の要衝であったことなど重要な地点であったものとみられる。また鎌倉時代から室町時代にかけて、近接する根来寺の勢力拡大によって少なからざる影響を受けるようになる。調査の結果、当地は山口御殿以前には当

時の権力者の屋敷地であった可能性が高く、朱書きされた青磁盤などから、根来寺との関係が強いものとみられる。(註5)

(3) 山口御殿関係遺構について

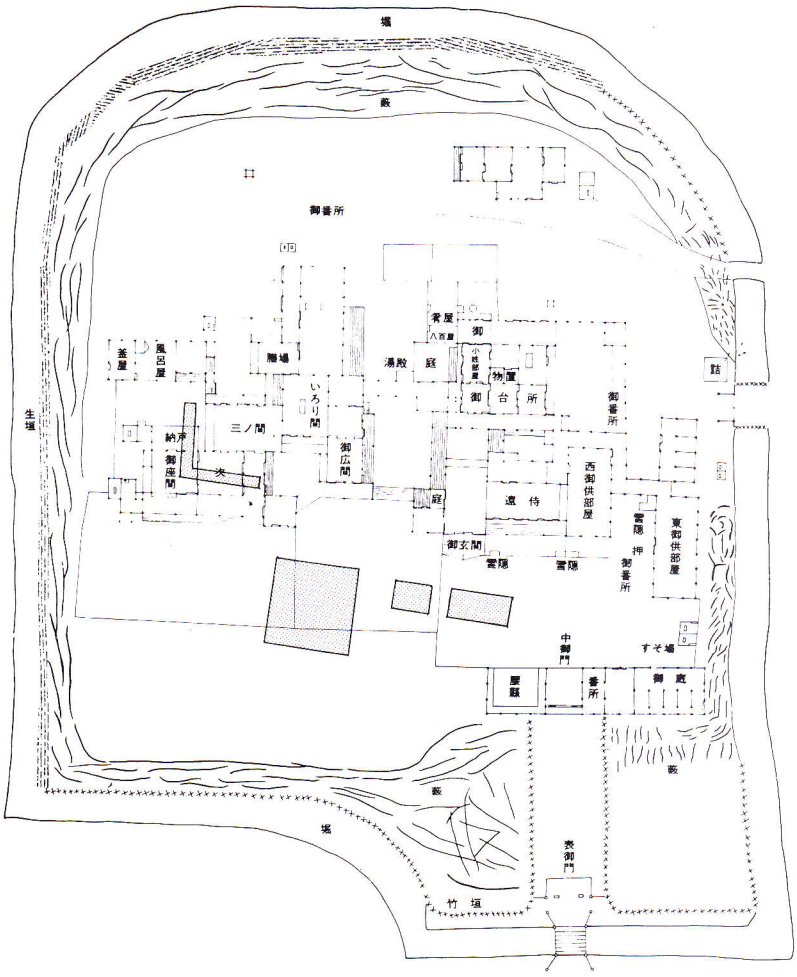
既往の調査範囲において山口御殿敷地内に相当する地域は、第１～４次調査地点と今回の第６次調査地点である。

まず既往の調査地点における山口御殿関係遺構は、「３.既往の調査」において詳細は述べているが、ここでも簡単にふれておく。まず第１次調査では御殿の周濠の東肩部が検出されている。この周濠肩部から周濠幅1.6ｍ以上、深さ１.0ｍを測ることが明らかにされた。また第２次調査では土塀などに伴って土地利用上の何らかの区切りの一部とみられる溝や柱間２ｍを測る５個の柱穴状ピット列、石組井戸や集石遺構が検出されている。なかでも石組井戸は砂岩の河原石を用いた円形のもので、内径60～70cm、ホリカタ2.1～2.2ｍ、底面までの深さ3.7ｍを測り、底面の標高は8.8ｍ程度とされる。この井戸の基底部は４個の石材を組み合わせ枡形に仕上げているものとされる。第３次調査では江戸時代の溝を検出しているが、山口御殿絵図に記載がないものとして扱われている。第４次調査では周濠、瓦敷き溝、礎石、埋桶遺構などが検出されている。

今回の調査地は山口御殿敷地内でもやや西側にあたり、第１・２区は御殿正面付近に、また第３区は山口御殿本体の中央やや西に位置すると推定された。(註6)この調査区を山口御殿平面図に重ねると第21図のとおりとなる。

この平面図から推定して、第１・２区は中御門から西にのび、「L」字状に折れ曲がるライン内もしくはライン付近に位置する。このラインは「中御門」からのび御殿を囲うような施設とみられ、形状から土塀状のものであるものと考えられる。調査の結果、第１区では全く御殿に関係する明確な遺構等は検出できなかった。しかし、第２区では調査区を東西に横切る２条の石列（SV-１・２）を検出し、この石列が先述の土塀状の基底部に相当するものと考えられた。

また第３区は御殿の「御座間」付近に推定された。



(註7)
第21図　山口御殿平面図

第３区では御殿に併行するとみられる時期の遺構としてピット数個を検出したが、これらはその並び等も不明であり、御殿の正確な位置を推定できる遺構等の状況が得られなかった。

註

(1)『太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報』　㈶和歌山市文化体育振興事業団　1995年
(2)『鳴神Ｖ遺跡発掘調査概要報告書』　㈶和歌山市文化体育振興事業団　1994年
(3) 和歌山市史編纂委員会　『和歌山市史』第４巻古代中世資料　和歌山市　1977年所収
(4) 註３文献と同じ
(5) 根来寺との関係については、和歌山市立博物館館長三尾功氏、同副館長寺西貞弘氏に御教示を受けた。
(6) 松田茂樹　「和歌山市北部における歴史的建造物（山口御殿）」　『文化財総合調査報告（２）』　和歌山市教育委員会　1979年所収
(7) 註６文献掲載の山口御殿平面図に今回の調査区を加筆して作成している。

【参考文献】

和歌山県史編さん委員会　『和歌山県史』中世　和歌山県　1996年
和歌山市史編纂委員会　『和歌山市史』第１巻　和歌山市　1991年
『山口遺跡第５次発掘調査報告書』　和歌山市教育委員会　1990年
『文化財総合調査報告（２）』　和歌山市教育委員会　1979年

報告書抄録

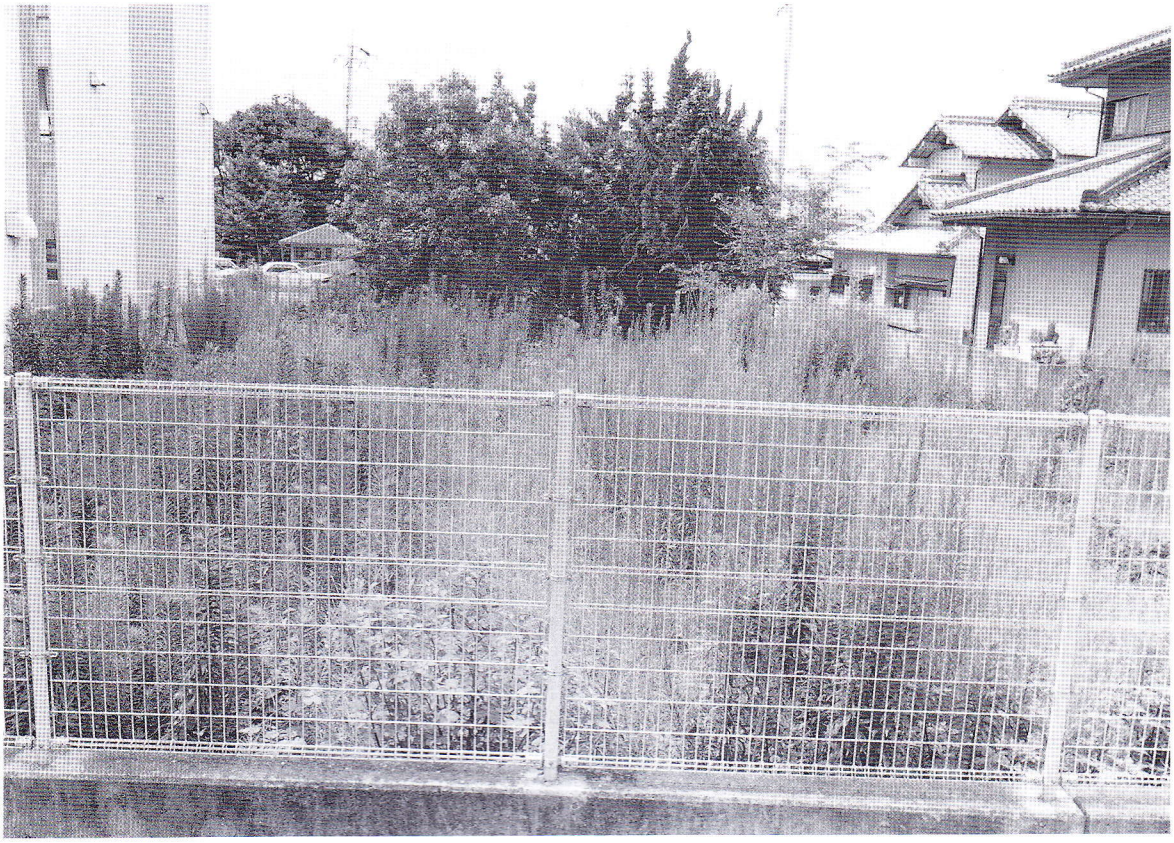
ふりがな	やまぐちいせきだい6じはっくつちょうさがいほう
書名	山口遺跡 第6次発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書
シリーズ番号	第21集
編著者名	井馬好英・藤薮勝則・前田敬彦
編集機関	財団法人 和歌山市文化体育振興事業団
所在地	〒640-8227 和歌山県和歌山市西汀丁29 TEL0734-35-1195
発行年月日	西暦 1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
やまぐちいせき 山口遺跡 やまぐちごてんあと 山口御殿跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 さと 里	3020150	142 380	34° 15′ 49″	135° 16′ 15″	19980728 19980903	214	山口小学校敷地拡張

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山口遺跡 山口御殿跡	集落跡 御殿跡	弥生時代～ 江戸時代	古墳時代の水田 室町時代の建物	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器・中近世陶磁器・瓦・銭貨など	古墳時代の水田に伴う畦畔。 朱書された中国製青磁盤。

図　　版

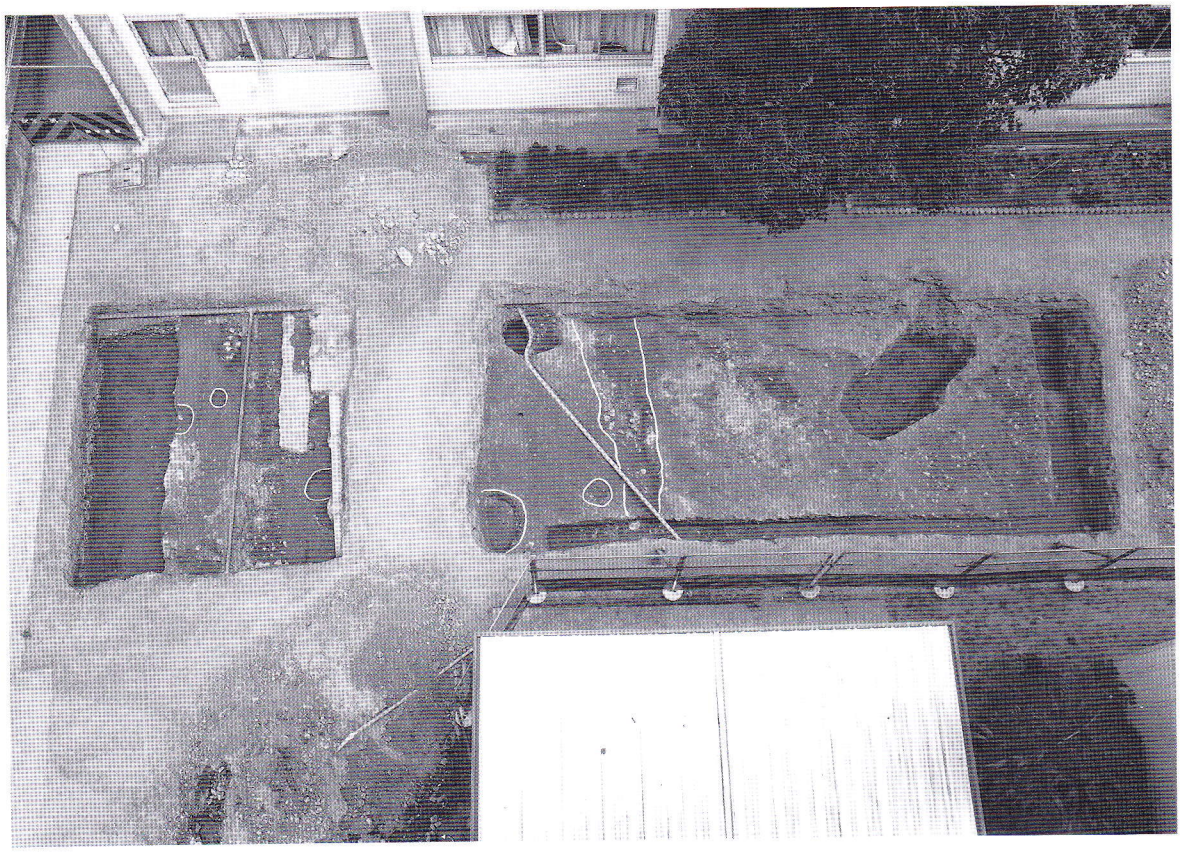
第１区　調査前の状況（西から）



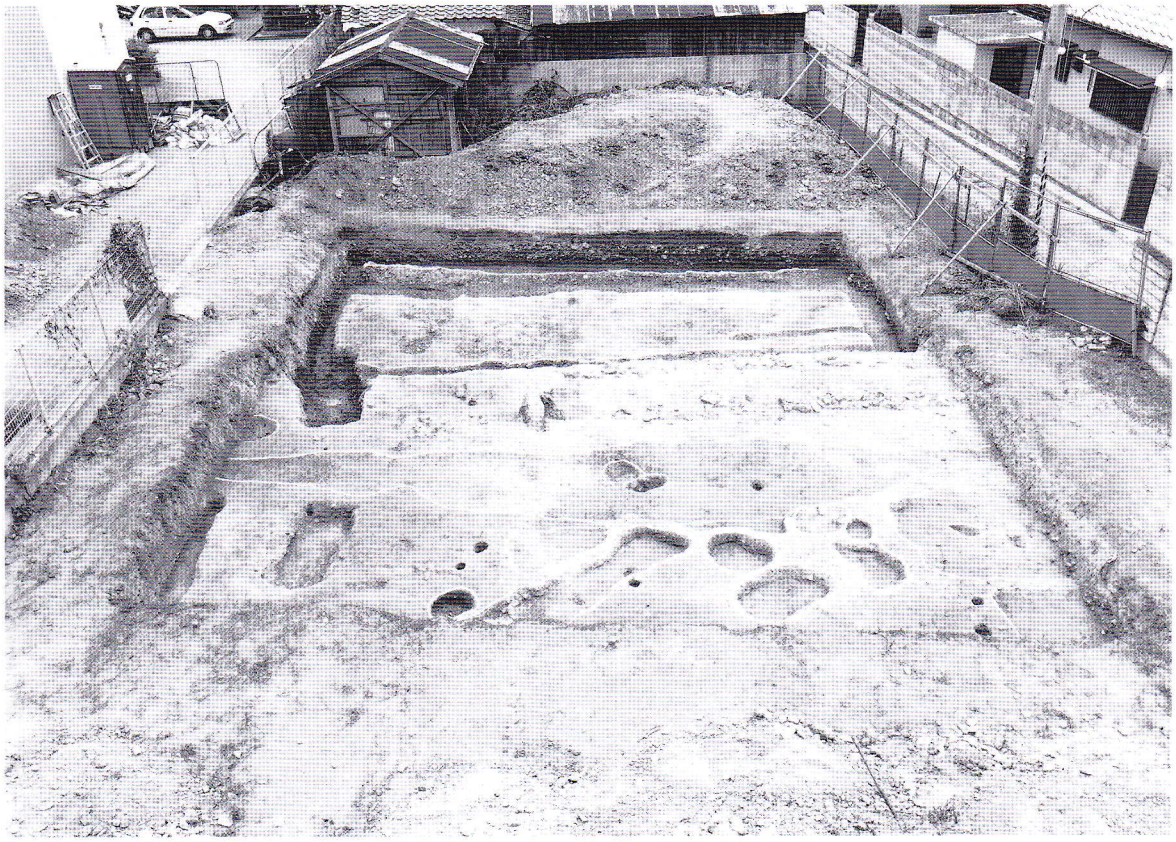
第２区　調査前の状況（北から）

図版2

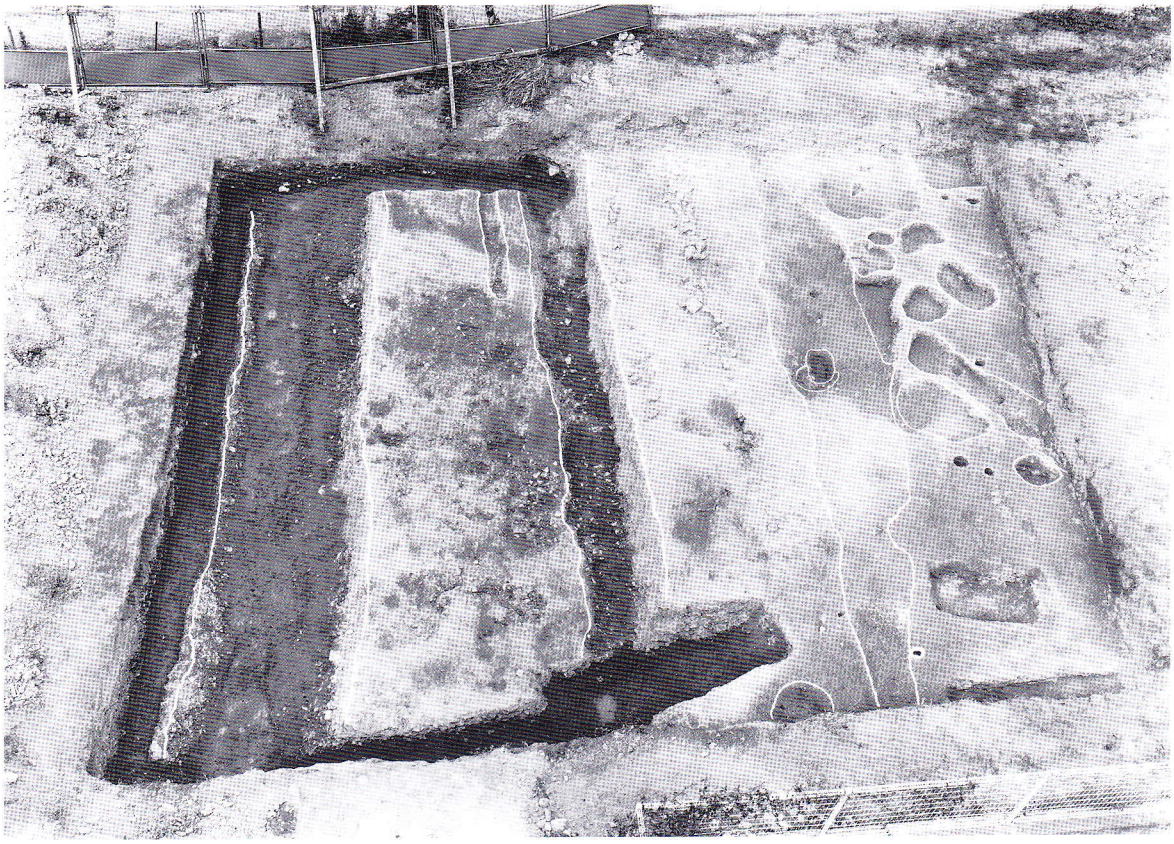
全景（東から）



第１区全景（南から）

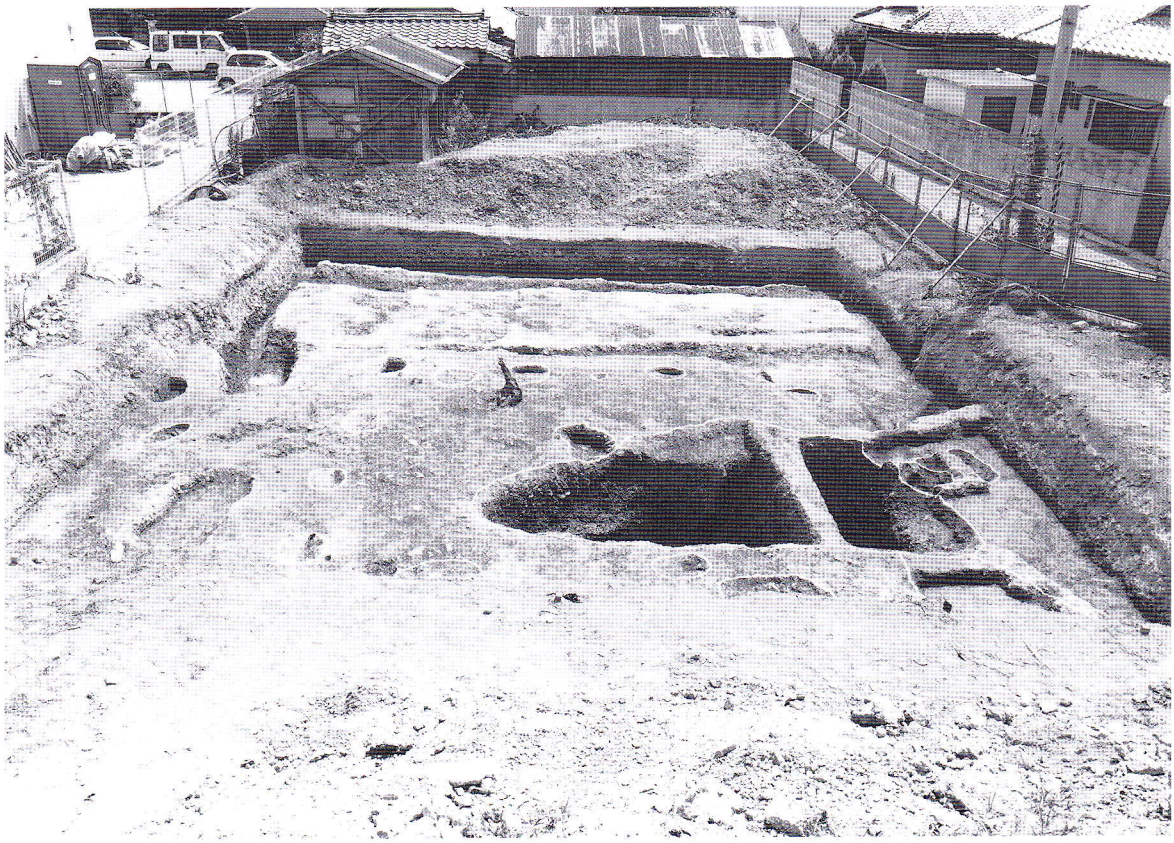


第２区　第１遺構面全景（北から）



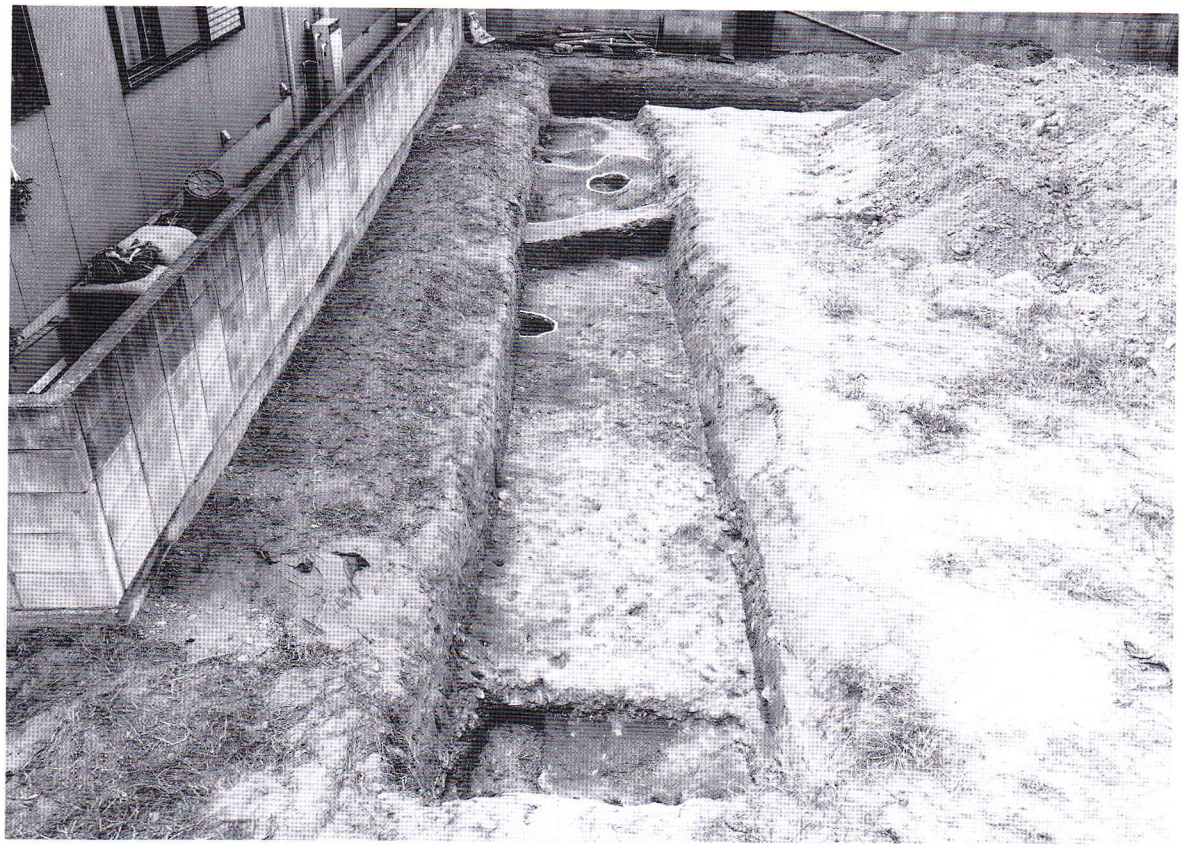
第２区　第１遺構面全景（東から）

図版4



第２区　第２遺構面全景（北から）

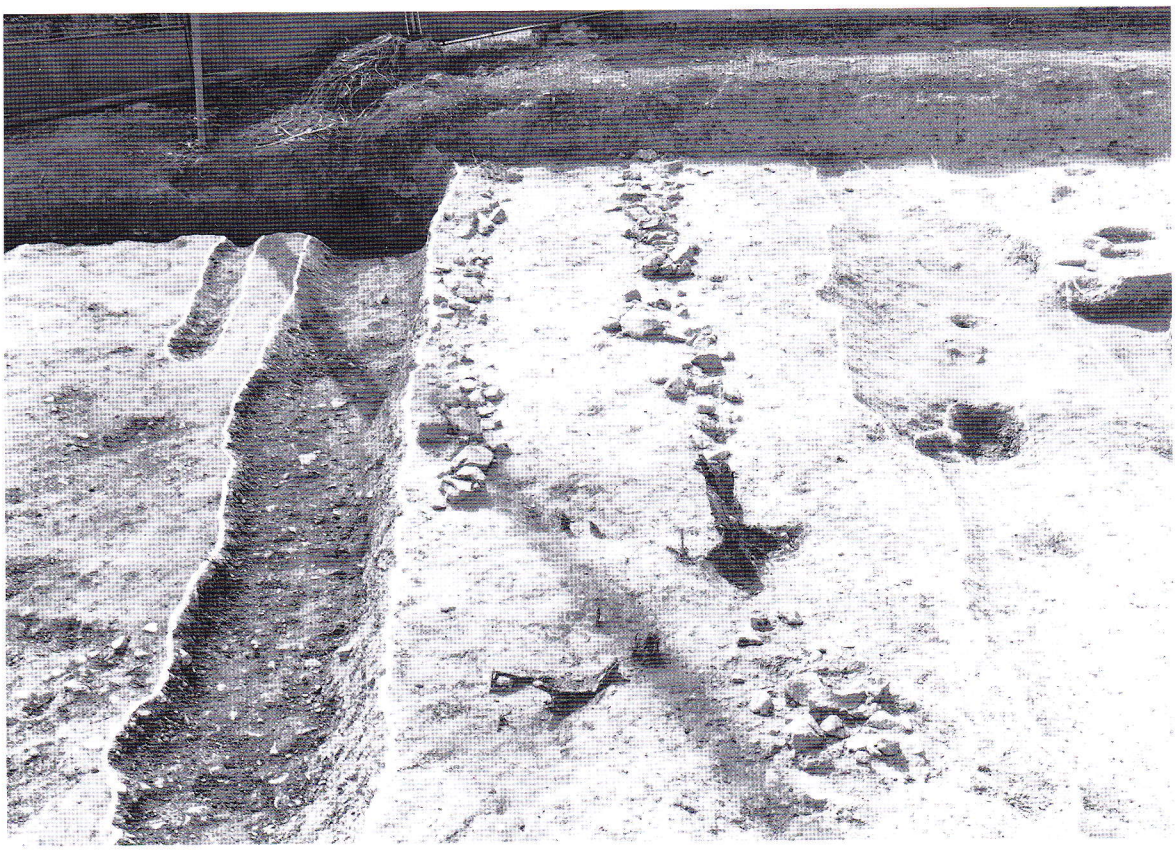
第２区　第２遺構面全景（東から）



第3区　東西トレンチ全景（東から）

第3区　南北トレンチ全景（北から）

図版6



第2区　SV-1・2（東から）

第2区　SD-6（東から）

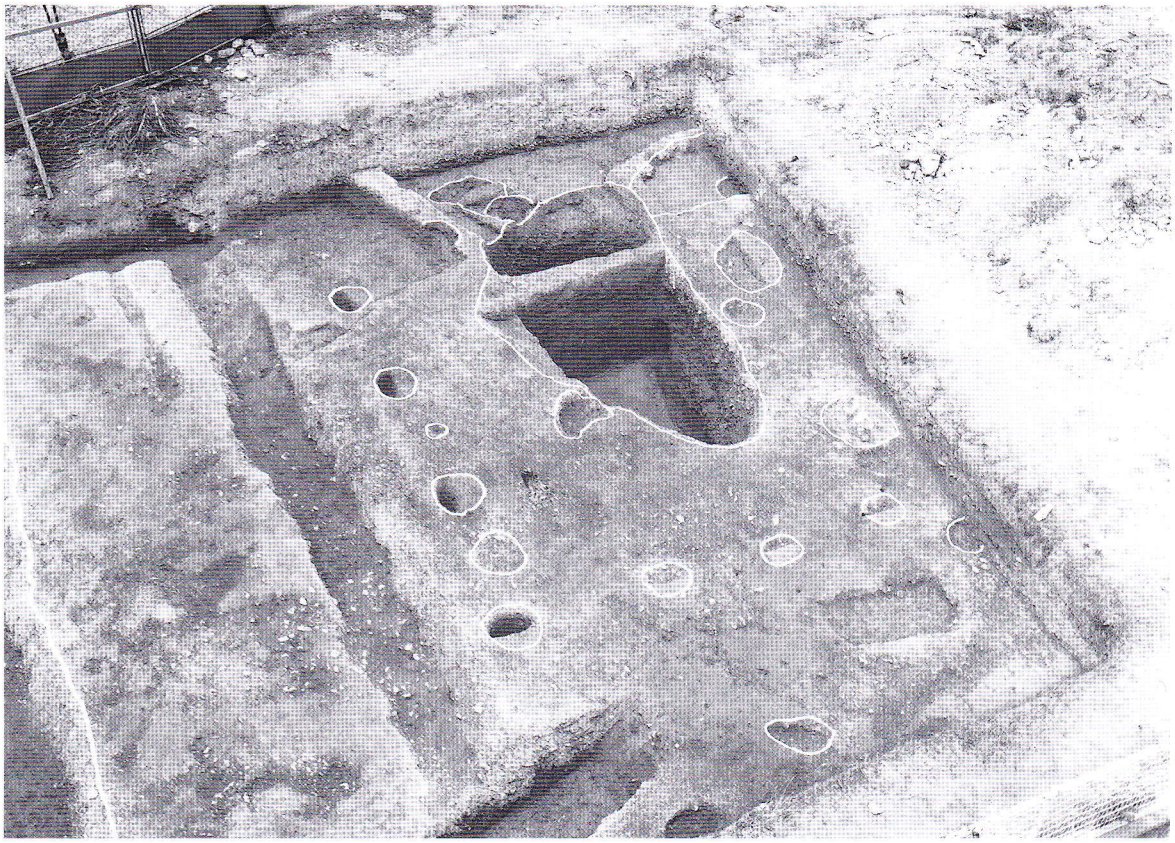
第2区　SD-6（西から）

第2区　東壁SD-6土層堆積状況（西から）

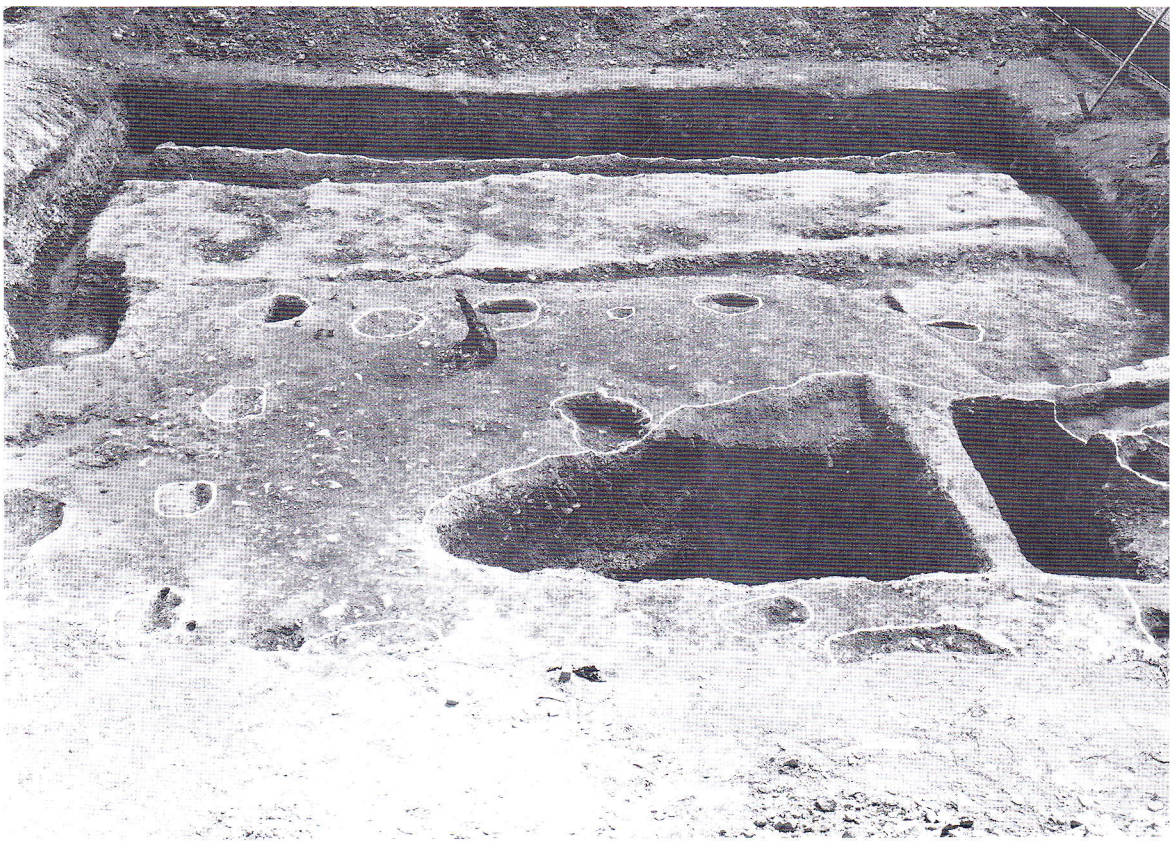
図版8

第2区　SK-6（北から）

第2区　SK-6土層堆積状況（東から）



第2区　ピット列（南東から）



第2区　ピット列（北から）

図版10

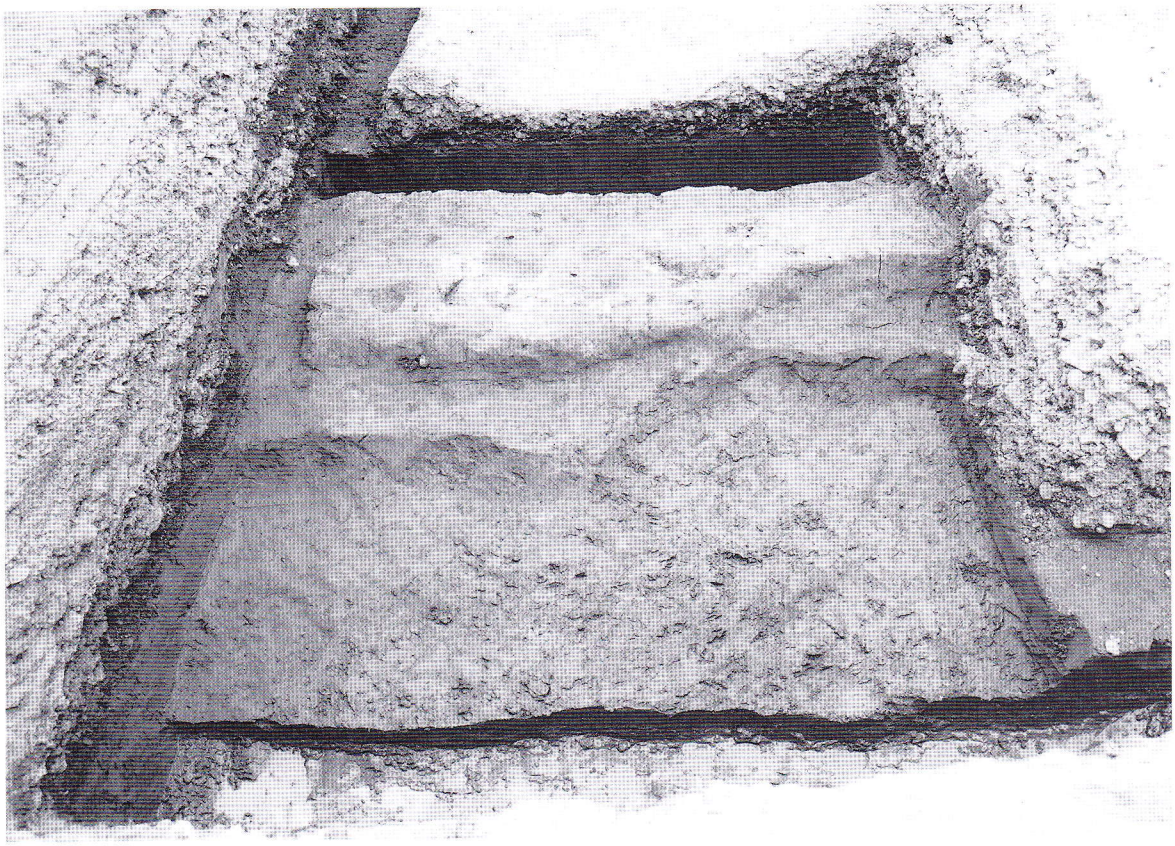
第２区　P-31・32（南から）

第２区　P-31土層堆積状況（南から）

第２区　第３遺構面（東から）

第２区　第３遺構面（北から）

図版12



第２区　第３遺構面水田遺構（東から）

第２区　東壁畦畔部土層観察状況（北から）

第２区　青磁盤出土状況（上が北）

第２区　青磁盤出土状況（上が東）

図版14

第１区　南壁Ｗ０～４ｍ付近土層堆積状況（北から）

第１区　南壁Ｗ４ｍ付近土層堆積状況（北から）

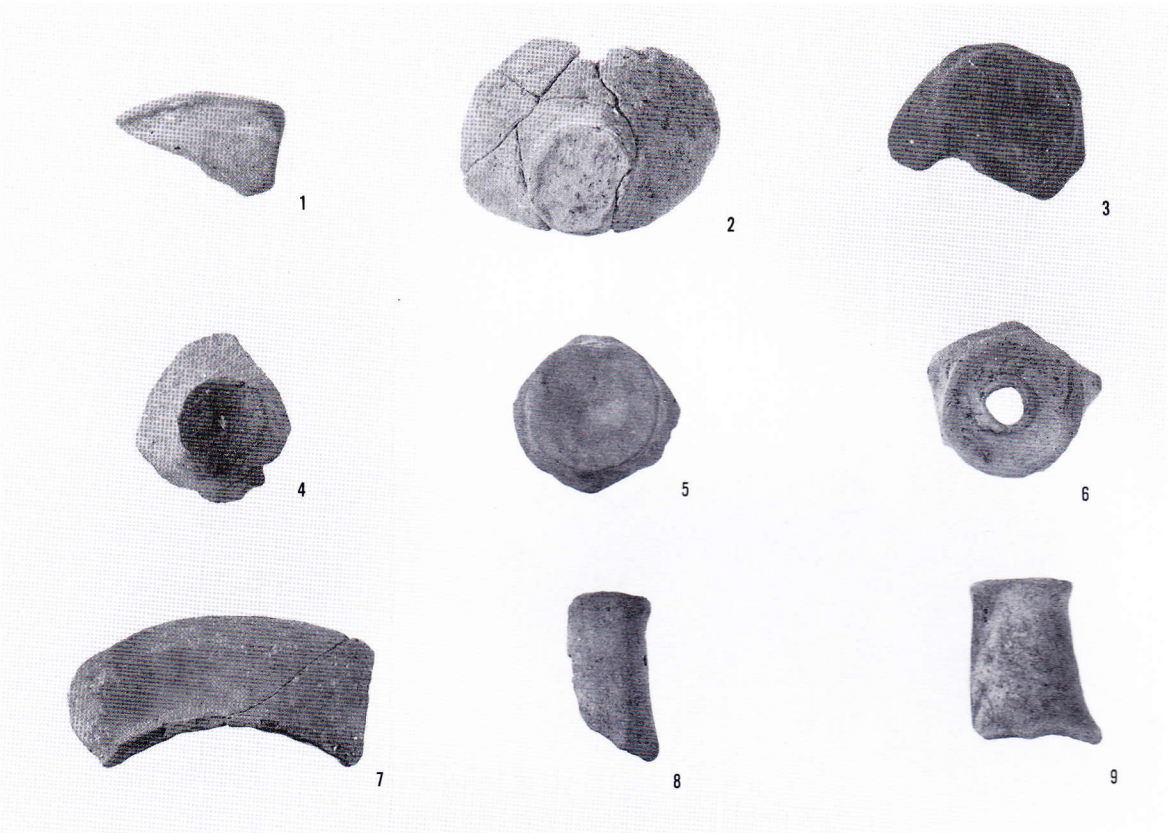
第２区　東壁S26ｍ付近土層堆積状況（西から）

第２区　南壁W21ｍ付近土層堆積状況（北から）

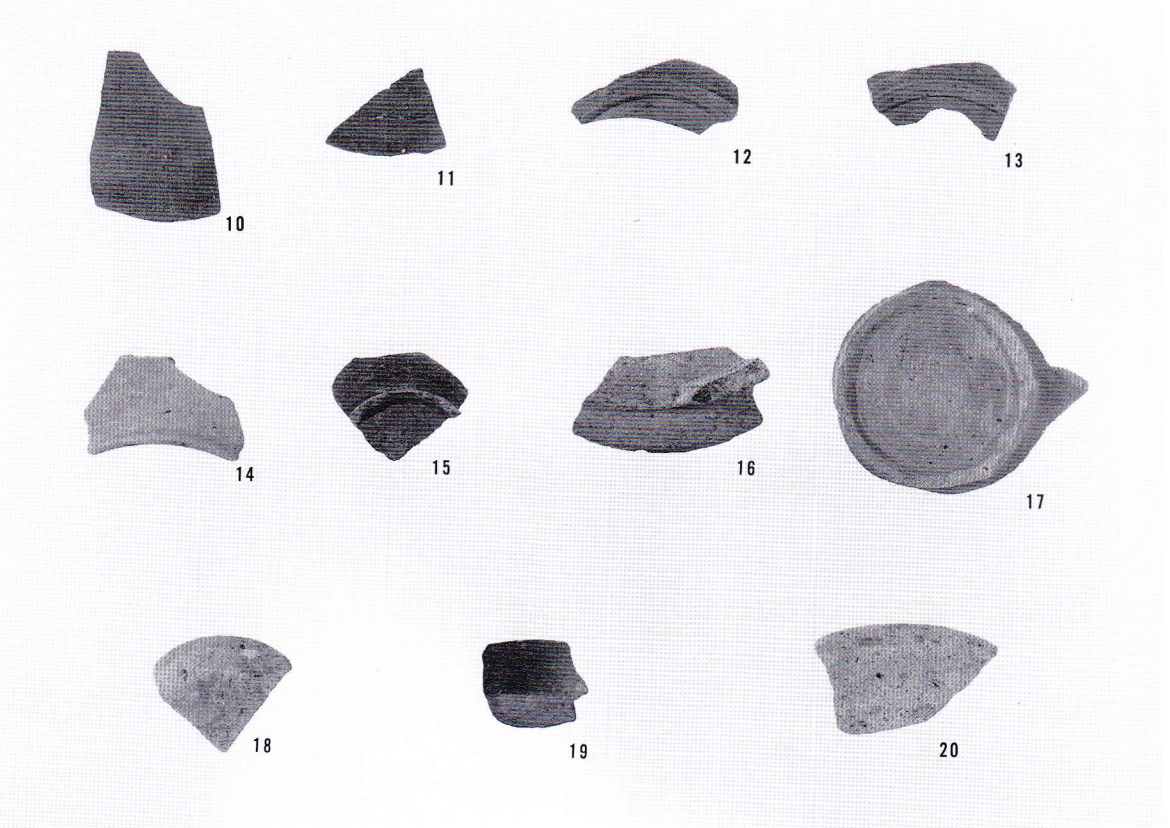
図版16

第３区　東西トレンチ南壁W34～38ｍ付近土層堆積状況（北から）

第３区　南北トレンチ西壁Ｓ２ｍ付近土層堆積状況（東から）

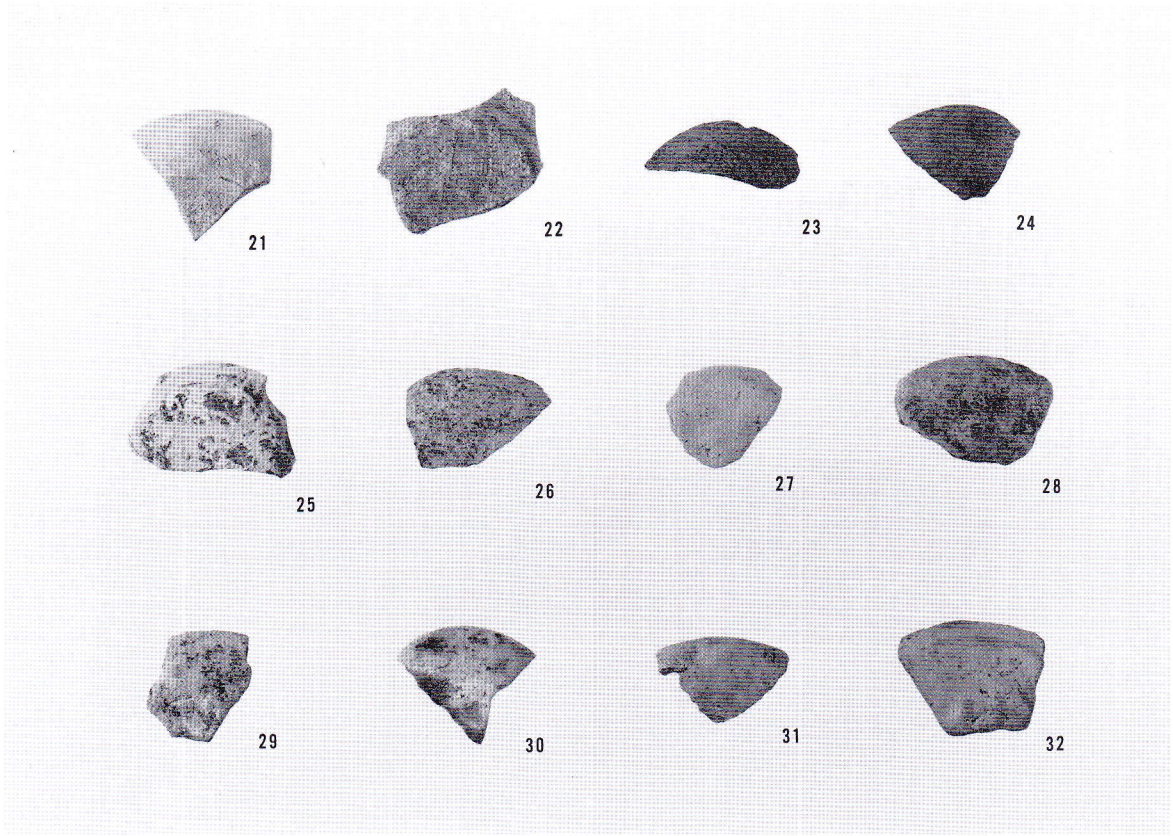


弥生土器　1 壺、2～5 底部、6 甑　土師器　7 甕、8・9 高杯

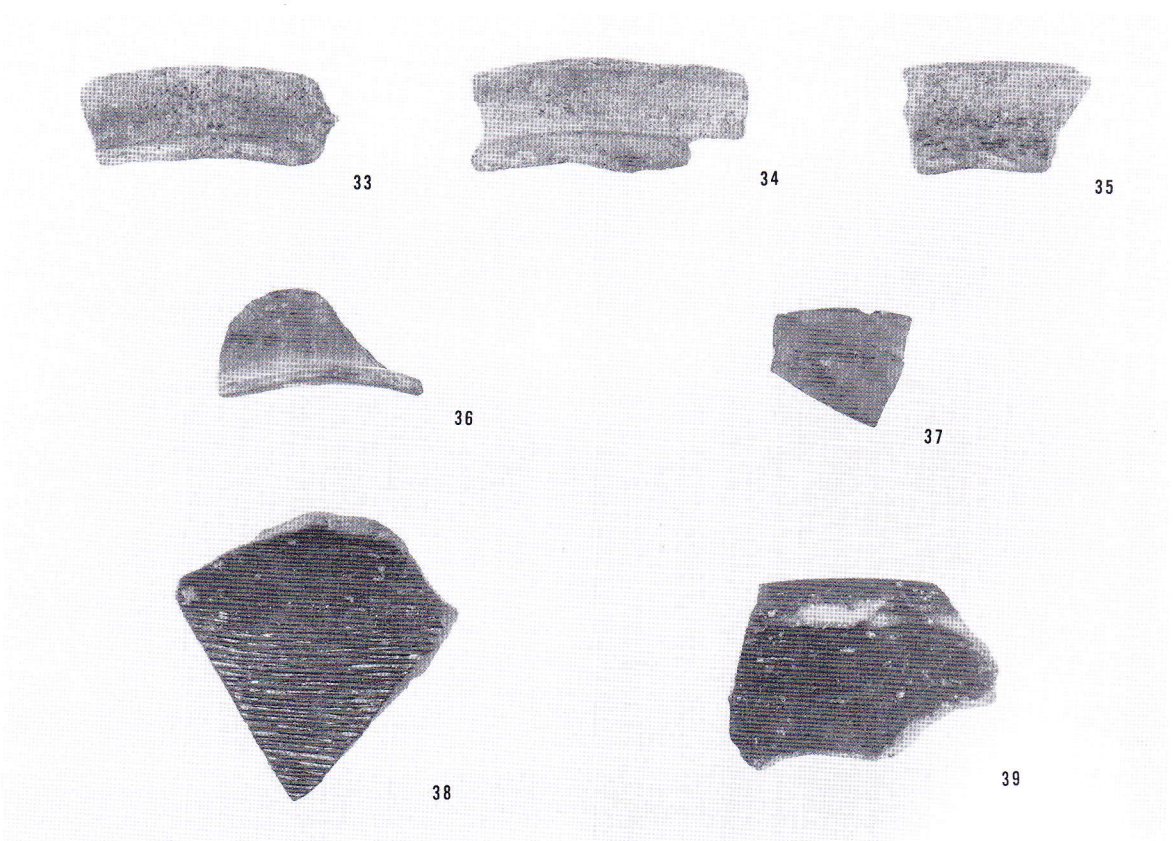


須恵器　10・11 杯蓋、12～14 杯身、15～17 壺、18 蓋　土師器　19 杯、20 皿

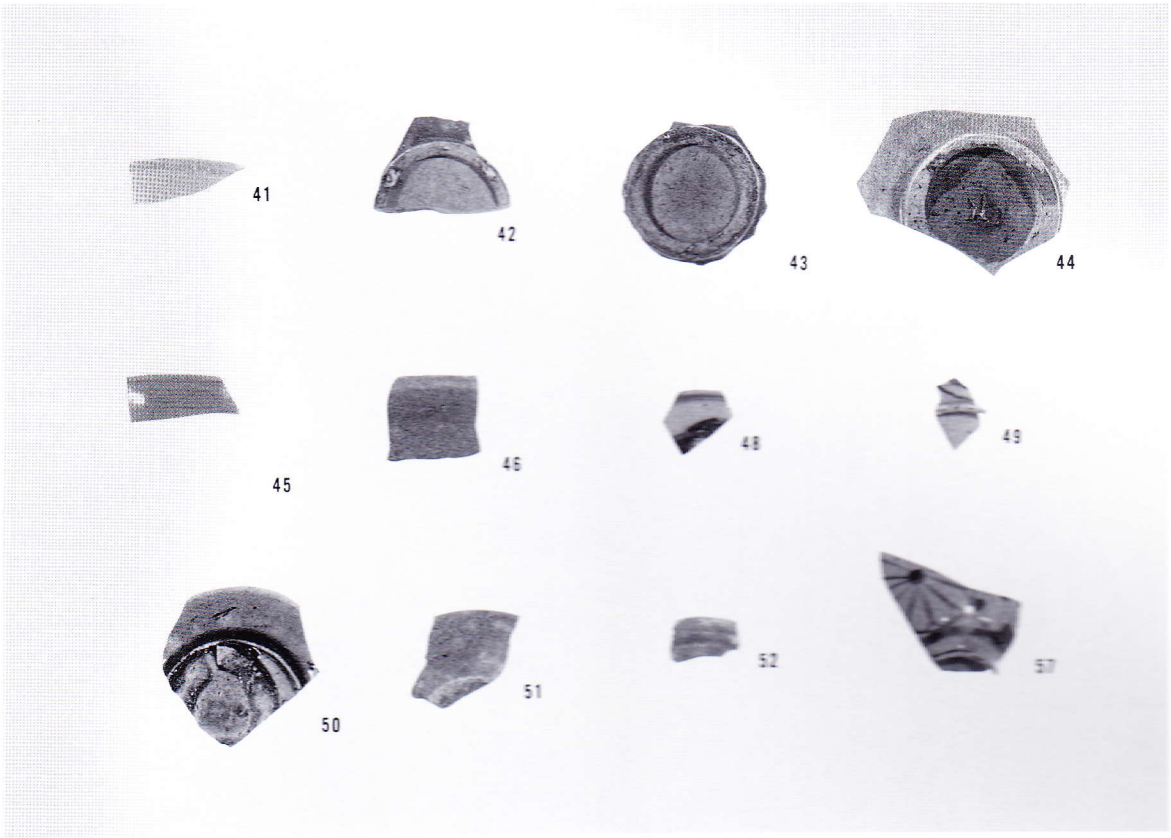
図版18



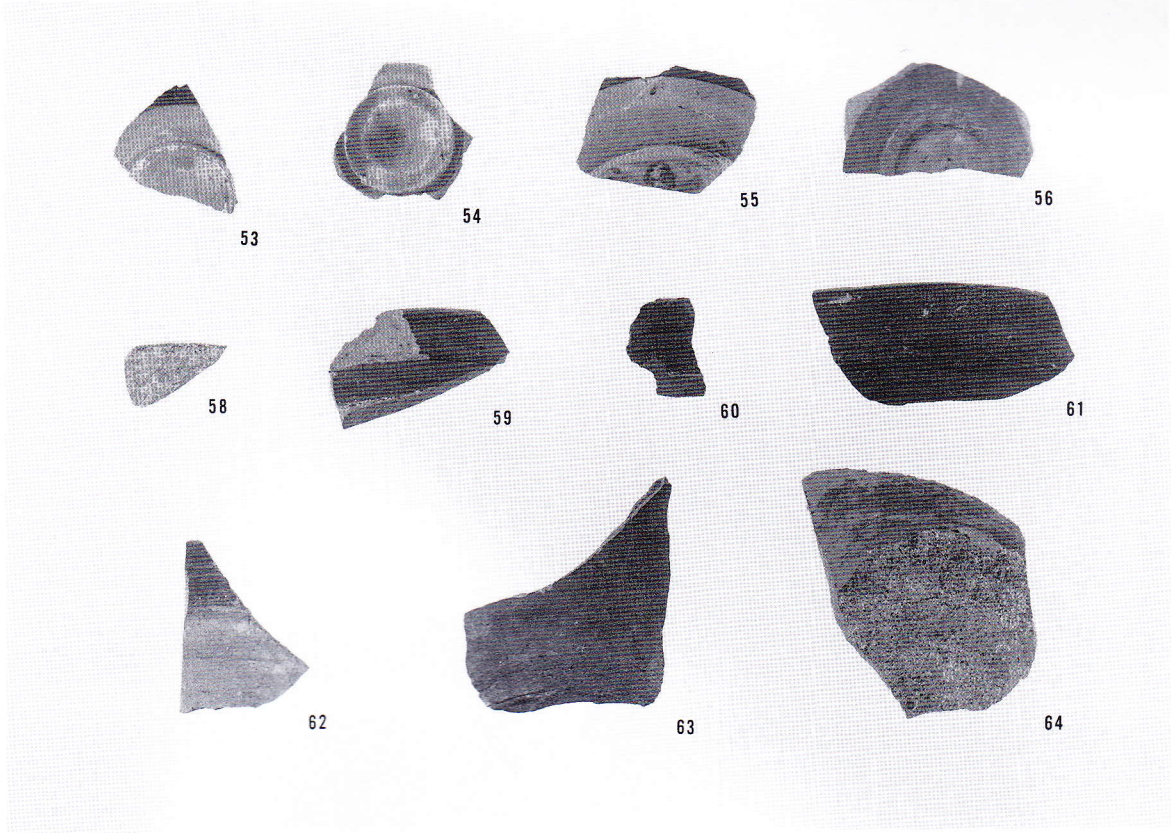
土師器 21～32 皿



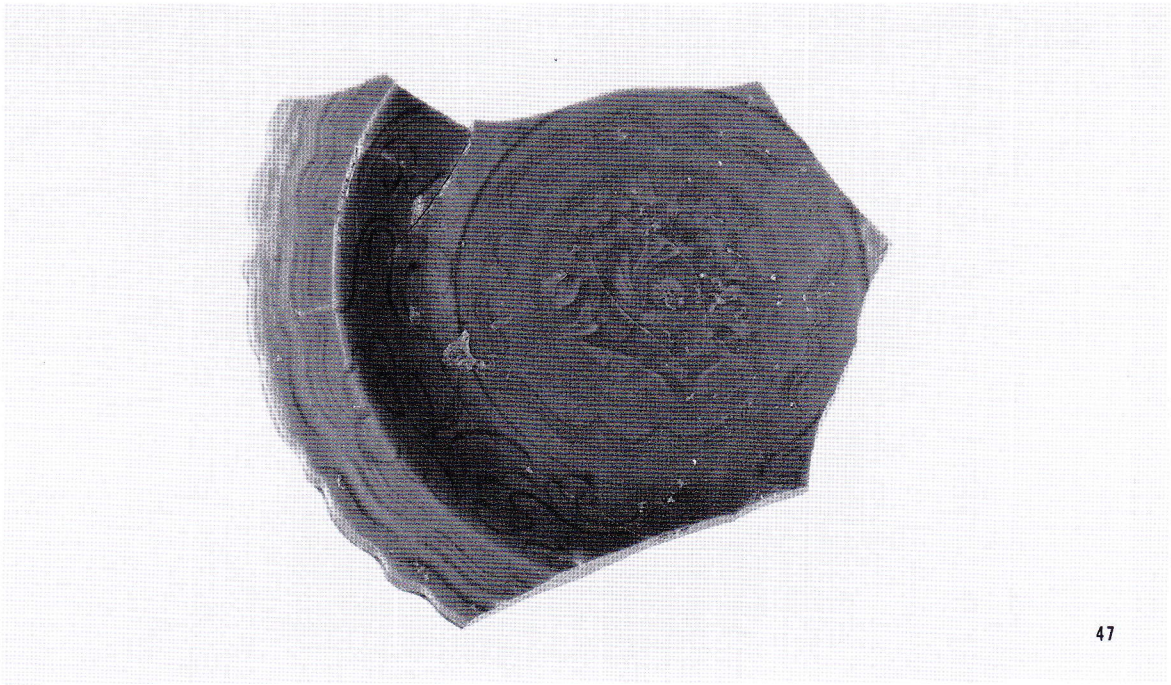
土師器 33～36 釜　瓦器 37 椀　瓦質土器 38 甕、39 すり鉢



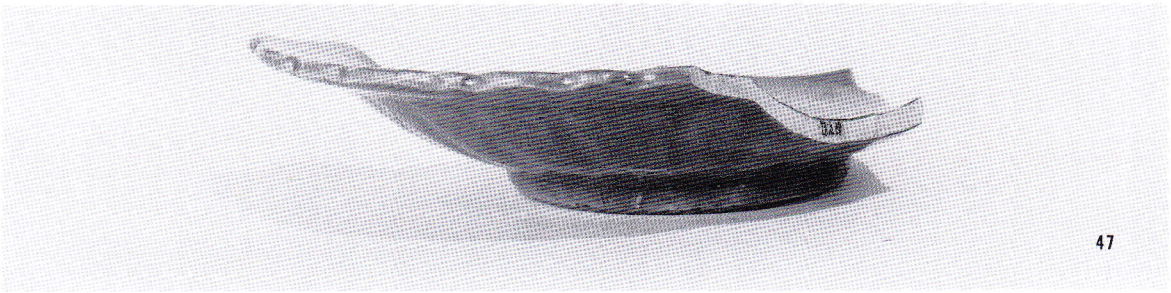
輸入陶磁器　白磁 41 碗　青磁 42～45 碗、46 盤　染付 48 碗、49 皿
国産陶磁器　瀬戸・美濃 50～52 灰釉皿　伊万里 57 碗



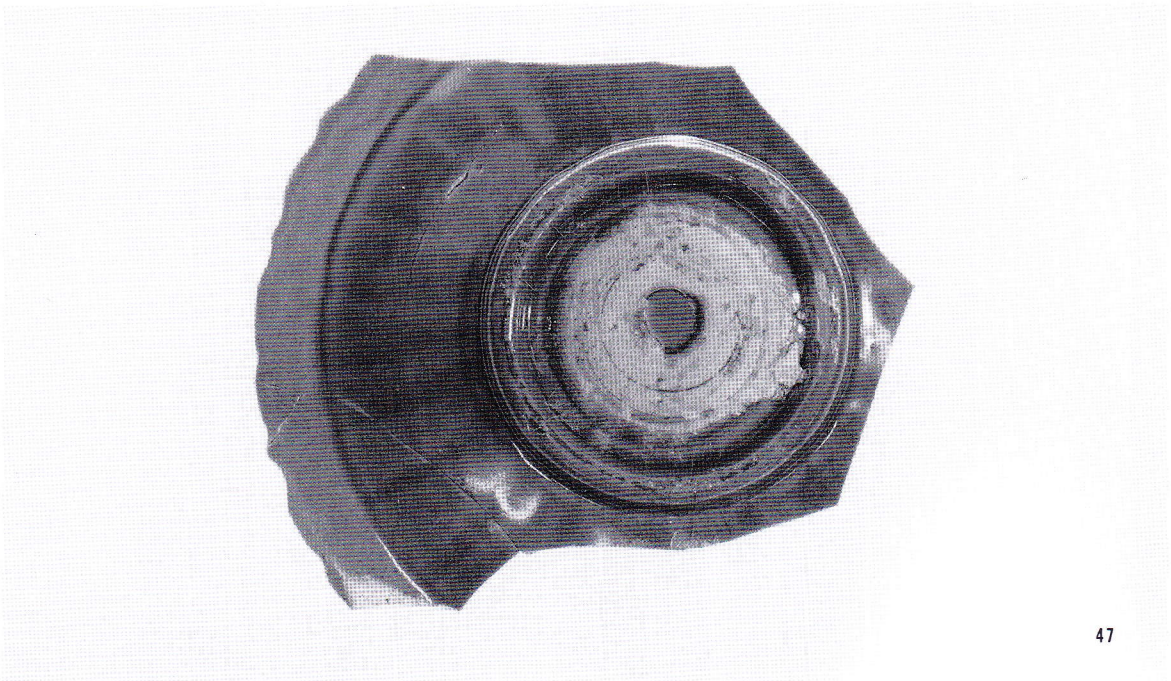
国産陶磁器　瀬戸・美濃 53～54 天目茶碗、55 壺　唐津 56 皿　備前 58 盤、60 壺、61～63 すり鉢　丹波 59 壺、64 すり鉢



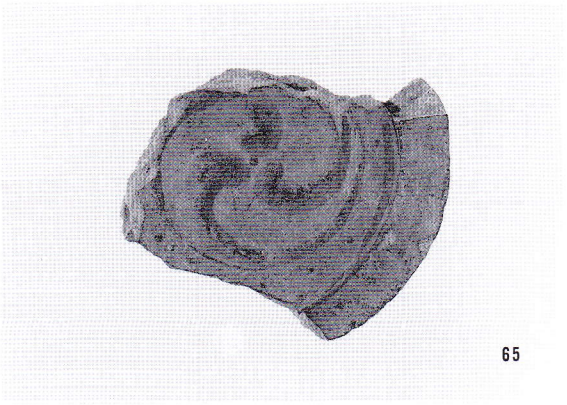
輸入陶磁器　青磁 47 盤（内面）



同上（側面）

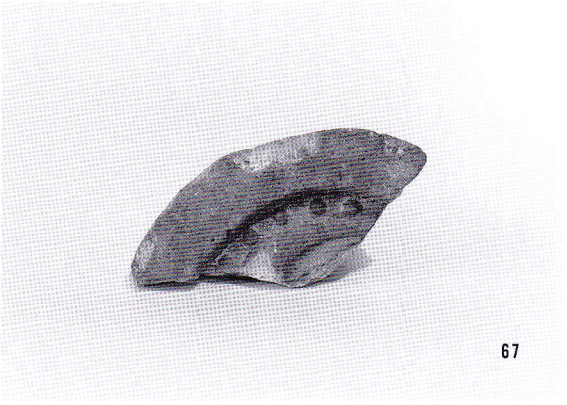


同上（外面）



65 軒丸瓦

66 軒丸瓦

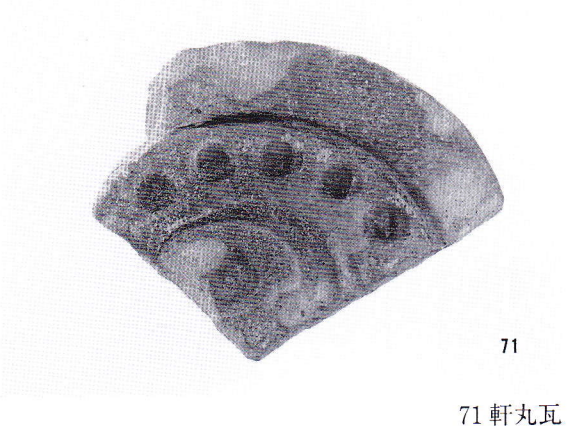


67軒丸瓦

68 軒丸瓦

69 軒丸瓦

70 軒丸瓦

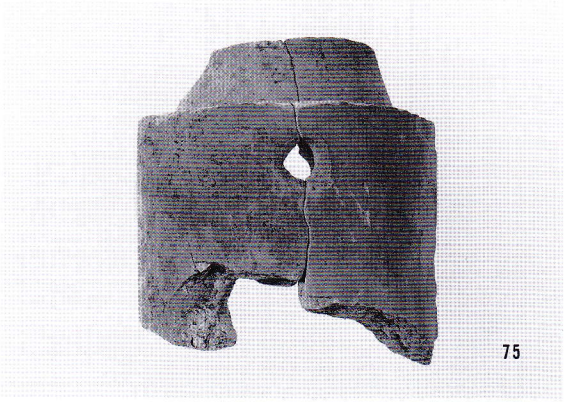


71 軒丸瓦

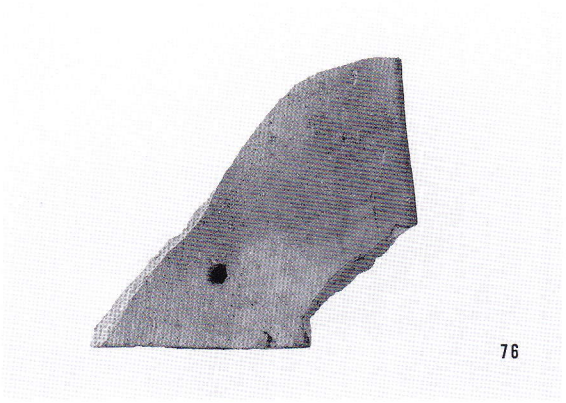
72 軒丸瓦

73 軒平瓦

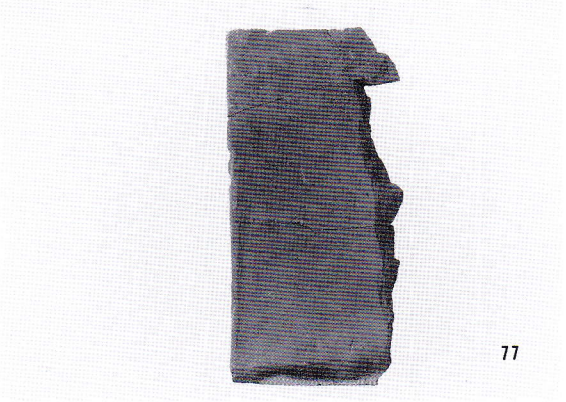
74 軒平瓦



75 丸瓦



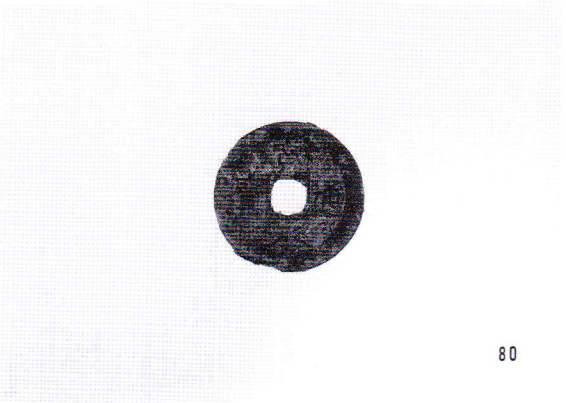
76 平瓦



77 平瓦

78 火打石

79 砥石



80 寛永通宝

平成11年３月31日発行

山口遺跡 第６次発掘調査概報

編集・発行　(財)和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印　　刷　西岡総合印刷株式会社

Ⓒ (財)和歌山市文化体育振興事業団 1999